



TITLE:

冊封進貢体制の動揺とその諸契機：
嘉慶・道光期の中琉關係を中心に

AUTHOR(S):

西里, 喜行

CITATION:

西里, 喜行. 冊封進貢体制の動揺とその諸契機：嘉慶・道光期の中琉關係を中心に. 東洋史研究 2000, 59(1): 69-113

ISSUE DATE:

2000-06-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/155336>

RIGHT:

冊封進貢體制の動搖とその諸契機

——嘉慶・道光期の中琉關係を中心に——

西里喜行

はじめに

I アヘン戦争前の宗屬關係の諸相

- 一 琉球貢船の遭難事故と海盜遭遇事件
- 二 漂流・漂着船の増加と密貿易對策
- 三 進貢國の貿易擴大志向と宗主國・屬國の對應
- 四 歐米商船の動向と宗主國・屬國の對應
- 五 琉球冊封使の派遣と貢期改定問題

II アヘン戦争のなかの琉球と福州

- 一 戦争勃發とインディアナーク號事件
 - 二 戦争の繼續と英國艦船の琉球「寄港」
 - 三 中英講和交渉と福州「開港」問題
- 結びに代えて——アヘン戦争後の外壓と琉球——

はじめに

中國王朝を中心として歴史的に形成された世界秩序は、中華帝國體制とか中華世界秩序などと稱され、その一環として

の東アジアの國際秩序は冊封體制とか進貢體制とか宗藩體制と規定され、その理念と實態をめぐって多くの検討が積み重ねられてきた。⁽¹⁾漢字文化圏と重なる東アジアにおいては、中國王朝の皇帝と周邊各國の首長との關係は、前者が後者を國王として冊封（任命）し、後者は前者の規定に従って進貢（貿易）するという冊封と進貢を前提（條件）とした關係であったことから、中國王朝を中心とする冊封・進貢の二國間關係の束（總體）を、ここでは冊封進貢體制と稱することにす

る。

冊封進貢體制の理念や實態をめぐる論點について、ここでさしあたり留意しておきたいことは、第一に、冊封進貢體制が歴史的に東アジア國際秩序のベースであり續けたとしても、一七世紀以後の東アジアについていえば、一元的な國際秩序となり得たわけではないことである。中國王朝を中心とする冊封進貢體制には朝鮮・越南・琉球が包攝されたけれども、中國王朝との宗屬關係に入らなかった幕藩體制下の日本は、薩摩藩を通じて琉球王國をコントロールし、獨自の海禁政策の中に琉球を包攝したことから、東アジアには冊封進貢體制的秩序と幕藩制的秩序が並立したことに注目すべきであろう。⁽²⁾

第二に、中國を中心とする冊封進貢體制に包攝されていた琉球が、同時に薩摩藩による實質的支配を通じて近世日本の幕藩體制に組み込まれていたことにより、並立する「二つの秩序」が琉球を媒介として一つに結びつけられ、相互補完的に東アジアの國際秩序を規定していたことである。換言すれば、琉球は陽には冊封進貢體制内の「自主國」として國際的に認知されるとともに、陰には薩摩藩の「附庸國」として幕藩體制に組み込まれたことによって、東アジア國際秩序の「要石」の位置に置かれていたことになる。⁽³⁾

第三に、冊封進貢體制の下にあっては、宗主國と屬國との關係（宗屬關係）は君臣・父子の關係に擬せられ、理念的には宗主國は屬國が政治的忠誠を表明する限り、その内政には干渉せず「自主」にまかせることを原則としていたけれども、屬國がその義務や責任を果たしていないとみなされる場合には、軍事的制裁をも含む「懲罰權」行使の可能性も内包

されていることに注目したい。⁽⁴⁾換言すれば、冊封進貢體制には、宗主國の下に統括される集團安全保障體制としての側面と、宗主國の屬國に對する政治的支配や民族的抑壓の手段としての側面も併存していたのである。

第四に、冊封進貢體制のメリットは、宗主國にとっては、「中華」の徳治を内外に誇示してその政治的支配の正當化・安定化を圖ることができる點にあつたこと、屬國にとつてのメリットは對外的な安全保障を得ることができただけでなく、國內的にも中國王朝の權威を藉りて國王支配の正當化・安定化を圖り、經濟的・文化的恩恵を享受することが可能であつたこと、とりわけ進貢貿易を通じて經濟的利益を得ることが期待できた點に、屬國にとつての最大の魅力があつたことである。⁽⁵⁾もっとも、屬國の經濟的利益が多ければ多いほど、宗主國の財政負擔は増大したことに注目すべきである。

第五に、軍事的な面だけでなく、政治的にも經濟的にも、冊封進貢體制を維持するためのコストは、ほとんど宗主國によつて負擔されていたと言えるけれども、屬國もまた冊封使の迎接・進貢使の派遣などの體制維持に必要なコストとリスクを相應に負擔したことに留意しておきたい。⁽⁶⁾むしろ、宗主國・屬國のいづれにおいても、體制維持のコストは最終的には民衆へ轉嫁されたのであつて、その意味では冊封進貢體制を安定的に維持できるかどうかは、最終的には宗主國あるいは屬國の民衆の動向にかかつていたといえる。

第六に、アヘン戦争以前には歐米商人も宗屬關係を規定する華夷秩序の理念を承認した上で、進貢を前提とせずとも「互市の國」として廣東貿易へ「參入」することができたにもかかわらず、自ら廣東貿易システムの解體を志向するに至り、アヘン戦争を契機として近代國際法——萬國公法の優位を主張するようになったことに注目したい。廣東貿易は長崎貿易と同様、冊封進貢體制を補完する要因であつたにもかかわらず、ついには體制崩壞の要因へ轉化したわけである。もっとも、アヘン戦争は體制的補完要因としての廣東貿易システムに終止符を打つただけで、冊封進貢體制そのものは半世紀の時間を経て最終的に解體されることにも留意すべきであらう。⁽⁷⁾

さて、以上の諸論點を踏まえつつ、冊封進貢體制を動搖・崩壊させた要因は何であったのかという視角から、冊封進貢體制の内實に注目するならば、アヘン戦争という體制外から加えられた壓力¹⁰外壓だけでなく、アヘン戦争前後の體制内の諸矛盾（内壓）の存在も重要な検討課題として浮上して来る。

本稿の意圖するところは、嘉慶・道光期即ちアヘン戦争前後の中琉關係を中心に据えて冊封進貢體制の諸相（諸矛盾）を提示し、體制を動搖させた諸契機（内外の壓力）の實態に注目してその歴史的意義を再検討しつつ、最終的には東アジア國際秩序の再編過程の特質へアプローチすることにある。

I アヘン戦争前の宗屬關係の諸相

一 琉球貢船の遭難事故と海盜遭遇事件

周知のように、冊封進貢體制の下では、宗主國の冊封使派遣と屬國の進貢使派遣は、體制維持のための必要不可欠の條件とみなされ、宗主國にとっても屬國にとっても、國家的プロジェクトとして位置づけられた。清代には朝鮮は一年四貢（年末にまとめて進貢）、琉球は二年一貢、越南は二年一貢（但し四年併進）、暹羅は三年一貢と規定され、定期的な進貢使の派遣を義務づけられていた。もっとも、進貢國の側は貿易機會の増加を圖るために派遣回數の多いことを期待し、琉球の場合は進貢使を迎えるための接貢船、遭風難民を護送するための護送船をも派遣している。⁽⁹⁾

進貢船・接貢船・護送船などの派遣に要するコストは貿易の利潤によって十分に埋め合わせることができたとしても、常に順調な航海が保障されていたわけではなく、航海途中の遭難のリスクも覺悟しなければならなかった。公務を帯びた琉球貢船（護送船を含む）の遭難の事例についていえば、嘉慶年間には、七年（三隻）、十一年（二隻）、十二年（三隻）、一五年（二隻）、二〇年（一隻）、二十一年（四隻）、二十二年（一隻）、二五年（一隻）、計八年に一七隻の事例を記録し、三

年に一回（二隻）の割合で貢船遭難事件が起きている。さらに道光年間の前半即ちアヘン戦争以前においては、二年（一隻）、四年（一隻）、六年（一隻）、七年（一隻）、一六年（二隻）、一九年（一隻）、計六年に七隻の貢船が遭難したことを確認できる。

遭難貢船の事例のなかには、乗船者に死者が出たり、船體や積荷・船具などに損傷を蒙りながらも、福州へ到達できた事例も含まれているけれども、嘉慶七年の進貢二號船の場合のように、「漂いて臺灣の大武備の外洋に至り、礁に衝りて撃碎せられ、貢品・貨物・行李等の項は盡く沈失を行い、官伴水梢共に八十人はまた俱に落水す」という傷ましい事例も後を絶たなかった。進貢船の派遣は常に大きなリスクをとまっていたのである。

臺風等の自然現象による遭難事故という避け難いリスクに加えて、海盜の掠奪に遭遇する可能性も常に存在した。たとえば、乾隆末年から嘉慶年間へかけての福建等の沿岸地域における海賊の横行について、琉球役人の神山親雲上他四名は次のように報告している。

去々年（乾隆五九）・去年（乾隆六〇）、福州其外近國大凶年ニ而、賣物甚高直ニ相成、世上極々難儀、夫故去々秋之比より海賊差越、諸國往來之船段々相劫、至當年（嘉慶元年）者、猶又亂増、福寧・温州・興化・廣東・廈門之洋面ニ賊船餘多致横行、聞々糧米運送之官船をも相劫シ、且海邊之村々江乗寄せ、容姿美麗之女子又者兵具等奪取、段々世上之妨ニ相成申候由。⁽¹²⁾

浙江・福建・廣東水域に出沒する海賊集團によって、琉球船が掠奪を蒙った事例は少なくない。乾隆六〇年には、①薩摩行きの「春楷船」が臺風に遭って温州府の平陽縣へ漂着し、「同所外洋ニ而賊船五艘江被取圍」、危機的状況へ陥ったけれども、清國側の兵船が姿を現したので危機を免れ、ようやく嘉慶元年三月に「官船五拾艘ニ而護送」され福州へ送られたという事例、②那覇から八重山への歸帆船が臺風に遭って漂流中に、「廣東之外山南奥と申所ニ而逢賊船」、一五・六歳の子ども一人と積荷のすべてを奪い取られたという事例なども報告されている。⁽¹³⁾

琉球進貢船も例外ではなく、「丙辰（嘉慶元年）秋」に派遣された進貢船二隻の内、二號船が翌年福州から歸國の途中海賊に遭遇した狀況について、『球陽』は次のように記録している。——「二號貢船、五虎門に在りて頭號貢船と一緒に放洋し、北方に駕駛するに、羅湖の洋面に在りて、賊船三隻、材木を裝載して温州に行かんとするの船兩隻を攻圍し、貨物及び船隻を奪取するを見る。即ち貢船の人数、兵器を取り出し、異風の鐵砲を打ち放てり。此の時、兵船は何の妨げありてか駕し來ること有る無し。將に天黑に至らんとすれば、益々防御を嚴しくし、駕し行きて斗米の洋面に在り。賊船兩隻、貢船の艫邊に駕し近づき、聲高に魚を賣るの船隻と稱するも、即ち大砲を放ちて圍み攻む。貢船、隨いで異風の鐵砲を放ちて夜間防御す云々」⁽¹⁴⁾。

清國海軍が賊船を取り締まらなかった理由は明らかでないけれども、琉球側の進貢二號船は自力で賊船の再攻撃を撃退し、無事歸國することができたことに注目すべきであろう。

五年後の一八〇〇（嘉慶五）年にも、「閩に赴くの進貢船、海賊に遇いて能く戦防を爲し」た事例が『球陽』に詳述されている。それによれば、頭號貢船が「羅湖の内洋に駕駛するの時、偶々南方より船一隻、貢船に直向して駛せ來るあり。（中略）正に防備を爲すの時、賊船、砲を放ちて走り來る。通船の人数、預め分局の如く、各々列立して間斷なく砲を放ち、銃鎗を打ち、以て防御を致す。該賊退去するも、未だ幾くならずして、貢船の羅湖洋面に駕し入るの時、又復南方に賊船一隻、貢船に直取して前み來るあり」という狀態で、貢船は賊船と何回も死闘を繰り返しつつ、辛うじて五虎門から閩江へ入り、清國の巡視船と遭遇して危機を脱することができたという。⁽¹⁵⁾この年には「海壇鎮の許廷進の護送せる琉球難夷名城等の船隻」が護送途中で暴風に遭遇して漂流しているところを、「盜匪の虜劫を被るを致し」、許廷進らが革職されるといふ事件も報告されている。⁽¹⁶⁾

琉球の貢船や漂流・漂着船を襲撃した海盜集團は、乾隆の末年から嘉慶一五年までの二十餘年にわたって廣東・福建・浙江の沿海地帯で猖獗を極めた「艇盜」の一部に他ならない。⁽¹⁷⁾いわゆる「嘉慶の艇盜の亂」が白蓮教の大反亂に次ぐ海上

の反亂勢力に發展したのは、既に矢野仁一博士が指摘しているように、⁽¹⁸⁾ 越南の内亂で一時權力を握った西山黨が中國人の海盜集團を「招誘保護」したことに起因している。一八〇二（嘉慶七）年に西山黨を一掃して越南を統一した阮朝は、海盜保護政策を放棄して逮捕した中國人海盜を清國へ獻上し、清朝との宗屬關係を再確認したものの、越南の根據地を失った海盜の殘存勢力は福建の蔡牽や廣東の朱漬らの海盜と連携したことから、なお一八一〇（嘉慶一五）年に至るまで、中國沿岸一帯の海上には一大海盜勢力が形成され、⁽¹⁹⁾ 琉球の貢船の派遣だけでなく、漂着船の護送をも困難に陥れる要因となっていたのである。

海盜による海上秩序の攪亂は乾隆・嘉慶期に特有の現象ではなく、清國の秩序維持能力の低下に比例して、道光期以後も頻發することに注目すべきであらう。⁽²⁰⁾

二 漂流・漂着船の増加と密貿易對策

臺風などによって清國沿岸へ漂着した「外邦の民人」の取り扱いについては、漂着地の「督撫に著して、有司を督率して加意撫恤せしめ、存公銀兩を動用して衣糧を賞給し、舟楫を修理し、並びに貨物を將って査還し、本國へ遣り歸らしめよ」という乾隆二年の上諭が遵守され、⁽²¹⁾ 琉球の漂着船や乗組員の場合は、一旦福州の琉球館へ護送され、⁽²²⁾ 福州から原船で歸國させるか、進貢船や接貢船に分乗して歸國させることになっていた。⁽²³⁾

貢船（護送船を含む）以外の民間の琉球船の清國への漂着件数についていえば、康熙朝六一年間に一七件、雍正朝一三年間に九件、乾隆朝六〇年間に七九件で、この三朝一三四年間に一〇五件、年平均一件弱の漂着件数が記録されている。ところが嘉慶朝二五年間だけで六八件、道光朝三〇年間に一〇一件へと急増し、嘉慶朝・道光朝の五五年間に一六九件、年平均三隻強の漂着事件を確認できる。これに前掲の貢船の遭難件数を加えれば、嘉慶・道光年間には年平均四件の琉球船漂着事件が発生したことになる。

清國へ漂着した琉球船の中には、嘉慶一四年の馬文彪らの漂着船の事例⁽²⁴⁾のように、船舶の賣却や積荷の時價取引によって、「銀一萬六百七十兩零」を手に入れ、「藥材」などは元手が取れなくなるという理由で持ち歸っている事例の外、道光元年の知念等の漂着船のように、破船と積荷を「銀二百七十二兩零」で賣却した事例⁽²⁵⁾など、ある種の貿易活動をとまなう事例が少なくない。あるいはまた、漂着琉球船が福州へ到達すると、南臺税關で積荷の免稅措置を講ぜられ、出港の際にも購入した清國製品の免稅を認められている⁽²⁶⁾。漂着後の琉球人に支給される撫恤銀や漂着地から福州までの護送費用、福州滞在中の生活費はすべて清國側の負擔であつた上に、清國側が買い取る漂着船の積荷や歸國の際の購入物品にも免稅措置が講じられるとすれば、琉球船の漂着件數が増加すればするほど、清國當局の財政的負擔も増大せざるを得なかつたことになるであらう。

他方で、一六八四（康熙三三）年の展海令以後、琉球は清國皇帝の要請に應えて、琉球漂着の清國船や朝鮮國船の乗組員を、長崎を経由せず直接福州へ送還する方針へ轉換し、一八世紀以後には江戸幕府（薩摩藩）もその方針轉換を追認した⁽²⁷⁾ことから、琉球漂着の中國人や朝鮮國人護送の任務とコストはすべて琉球側の負擔となつた。清國船や朝鮮國船の琉球漂着事例⁽²⁸⁾については、嘉慶年間には清國船は一件、朝鮮國船は四件、計一五件、道光年間には清國船一四件、朝鮮國船一〇件、計二四件の事例が記録されている。

琉球當局は送還ルートの變更に成功したものの、漂着人數が多い場合には進貢船や接貢船を利用するわけにはいかず、特別仕立ての護送船を派遣しなければならなかつた。かくて、嘉慶・道光期には護送コストを相殺するためにも、護送船貿易を重視することになる⁽²⁹⁾。護送船に對しても、清國側は進貢船・接貢船と同様に輸出入貿易を認め、しかも輸出入品には總て免稅措置を講じたので、琉球側は護送船貿易によって一定の利益を確保することができたことから、むしろ貿易の機會を得る目的で護送船派遣に積極的となつたと言ふべきであらう。もっとも、免稅措置などで琉球側が得た利益が多ければ多いほど、清國側の經濟的負擔が増大したことは言うまでもない。

漂流・漂着船の増加は冊封進貢體制内の各國に財政負擔の増大を強いることを意味しただけでなく、體制の根幹に関わる問題をも提起した。密貿易の可能性である。嘉慶・道光年間に琉球船の漂着件数が急増した背景には、琉球海域における交易活動の増大⁽³⁰⁾、清國の沿海地域における航運業や遠隔地商業の發達⁽³¹⁾などの要因が想定されるけれども、これらの要因は一定の條件のもとでは密貿易へ轉化する可能性を帯びていた。漂着船の密貿易取締令は、その一例證であらう。

琉球當局は冊封進貢體制を揺るがしかねない漂着船の密貿易取締令を、乾隆五〇年、嘉慶一九年、道光四年、道光六年、道光一二年と繰り返して令達している。乾隆五〇年⁽³²⁾の令達によれば、琉球當局は琉球船の清國漂着件数が増加している理由について、清國當局の有り難い御慈悲を蒙ることを期待してのことか、あるいはまた「商賣の心懸共にて態々乗行候敷」と疑い、且つ清國當局にも「件の趣相い疑われ候由」との情報に接して、「進貢の御故障」になるのではないかと深刻な憂慮を表明せざるを得なかったのである。

嘉慶一九年の令達⁽³³⁾では、①前年清國へ漂着した琉球船二艘の内、一艘は歸途琉球を避けて薩摩の「崎之津口」という所へ着船し、役人に積荷の清國製品を沒收されたこと、②この密貿易事件は「公儀」（江戸）へ報告され、江戸中の噂となつてゐること、③幕府や薩摩藩の取調べを受けることになれば「甚だ以御難題ニも成立申答候處、不及其儀」、今回は不問に付して貰つたことなどが指摘されている。幕府や薩摩藩が不問に付した理由は明らかでないけれども、琉球當局は警戒心を強めつつ、「商買^{（イ）}を心懸、態々御國元（薩摩）江乗行候儀共有之候ては、甚だ以不可然事」と強調し、再度漂着船取締の強化を令達せざるを得なかったのである。ここでは、琉球「漂着船」が清國と薩摩を往來しながら密貿易を展開していたという事實に留意しておきたい。

取締令が令達されても、漂着船の密貿易は後を絶たず、道光年間に入つても、道光四年に續いて道光六年にも次のような令達が琉球全域に通達されている。——「頃年、御當地之船々、繁々唐漂着、就中、浙江省江は打續多艘致漂着、右付而は商賣ニ存、態々乗行候筋、官人衆被相疑、段々逢御掛引、爲及難澁段、勢頭・大夫申越有之候。船々唐江漂着不致様

ニとの儀は、去々年も分ケ而被仰渡置候處、其汲受無之、甚以不可然候。今成打續漂着於有之ハ、御難題之基⁽³⁴⁾云々。

要するに、①最近、浙江省への漂着船が相い繼ぎ、清國當局は「商賣」のためではないかと疑い、進貢正副使と談判に及び、困難な事態が生じている、②漂着取締については一昨年も令達したのに効果がなく、このままの状態が續けば「御難題之基」になる可能性があるというわけである。かくて琉球當局は福州琉球館の存留通事に對して、漂着船の積荷を點檢し、「交易方一切差止、たとひ癩ニ可相成品ニても、其儘積歸させ」、遠洋航海には壓載貨物が必要だと申し出てきても「唐物類積入方不差免」、交易不可能の措置を採るよう指示している⁽³⁵⁾。しかし、このような措置もほとんど効果がなかったことは、道光一二年の令達でも「去々年は四艘前後も唐漂着有之、態々商賣の心掛を以て乘行候筋に相見得」云々と指摘されていることによつても窺知されるであらう。

この令達が出された翌年には、山東省日照縣に漂着した琉球船が縣當局の監視の隙をついて「即ちに風に乘じて南下」したため、道光帝は「攔阻する能わざる」の知縣を處分せよと命じ、「該夷船風に乘じて南駛すれば自づから必ず閩洋より回國すべし。該督等は著して即ちに沿海の文武員弁へ通飭し、認真に巡探せしめ、如し該夷船閩に到れば、即ちに速やかに本國へ回らしめよ。並びに該國王に知照し、該夷船の回國の時に於いて、伊の國內の商船に係るや、何時回國するやを查明せしめ、即ちに閩省督撫に咨覆して查照するを行わしめ、便に遇えば覆奏せしめよ」との上諭を下している⁽³⁶⁾。琉球船の乗船者永照屋らは江南の贛榆縣で發見されて再び日照縣へ送り回され、原船・器具及び積荷のすべてを「銀伍拾肆兩零」に「變價」して福州經由で歸國したけれども、密貿易の可能性を清國側から疑われたことに留意すべきであらう⁽³⁷⁾。

漂流・漂着と貿易活動とは全く無縁ではなく、情況次第でどちらへも轉化し得る可能性を内包していることから、密貿易取締令によつて民衆の間に昂まり續ける貿易欲求を押さえ込むことは不可能になりつつあったのである。

三 進貢國の貿易擴大志向と宗主國の對應

宗主國のコントロールのもとで許容される公貿易＝進貢貿易においても、進貢國の貿易擴大の欲求は絶えず潜在していた。貢期を二年一貢と規定された琉球は、一六七八（康熙一七）年に「敕書及び貢使を迎接する」ためという理由で接貢船の派遣を願ひ出て許可されて以來、進貢船と接貢船を毎年交互に派遣して、實質的に一年一回の貿易機會を獲得したばかりでなく、謝恩船・慶賀船・探問船などと稱して遣船し、あるいはまた前述のように琉球漂着の清國人・朝鮮人送還のための護送船を創出し、嘉慶・道光期には護送船貿易をも進貢船・接貢船貿易と同様に重視するに至る。護送船派遣事例についていえば、嘉慶期には嘉慶一五年、二〇年、二二年の三回、道光期には道光元年、三年秋、五年、五年秋、七年、一一年、一七年、二一年の八回の派遣事例を確認することができる。

進貢貿易について言えば、琉球の場合は冊封進貢體制と幕藩體制の双方から二重の規定を受けざるを得なかった。一方の江戸幕府は進貢貿易への投資額（渡唐銀）の限度について、進貢船の場合一萬三千四百兩（銀八〇四貫）、接貢船の場合はその半額とすることを命じ、薩摩藩は幕府の規定内で琉球の進貢貿易をコントロールするために苦心したが、琉球側では幕藩制國家の貿易編成策を空洞化させる試みを繰り返し、進貢貿易における主體性の回復を模索し續けた。進貢船・接貢船の使節隨員や乗組員が幕府や薩摩藩の監視を潜り抜けて「隱投銀」を清國へ持ち込み、大量の清國製品を購入したり、拔荷（密貿易）を繰り返したことは周知の通りである。⁽⁴⁴⁾ 琉球側の進貢貿易擴大志向は常に兩體制を揺るがす要因へ轉化する可能性を帯びていたことに注目すべきであらう。

嘉慶・道光期の清國と琉球の間の進貢貿易の特徴を概括すれば、第一に清國から琉球へ持ち歸る貨物の免稅額が琉球から清國へ持ち込む貨物の免稅額の十倍以上に達していること、第二に清國から持ち歸る貨物の免稅額が進貢船の場合は一、二千兩前後であるのに對して、接貢船の場合は五百兩前後から二千五百兩前後までの間で増減していること、第三に進貢

船・接貢船の免稅額はいづれの場合も、嘉慶以前の二倍に達していることである。⁽⁴⁵⁾このことは、嘉慶・道光期に琉球貢船が清國へ持ち込む「銀兩」(渡唐銀・隱投銀)が急増したことを意味している。

清國側でも進貢貿易をコントロールする見地から、琉球貢船の持ち込む銀兩には監視の目を向けざるを得なかった。琉球貢船の持ち込む貨物の數量や銀兩について、清國側は制限額を設定していたわけではないけれども、乾隆一二年の時點で琉球側報告の數量や金額が實情とあまりにも懸け離れていることに不信を抱いた福建當局の上奏を契機に、査察制度が設定されるに至る。⁽⁴⁶⁾しかし、幕府や薩摩には内緒で「隱投銀」を持ち込み貿易の擴大を圖りたい琉球側にとっては、實際の數量と金額をそのまま報告できない事情があり、貿易をめぐる清國と琉球、琉球と薩摩の利害對立を調整し處理するためのマニュアルを用意しておく必要があった。例えば、琉球の正副使が「貢船兩隻の帶びる所の銀兩は共に一萬兩あり」と報告したところ、福建布政司から「私に自ら多く銀兩を帶び、貨物を購買」しているとの噂があるので「帶びる所の銀兩は實に據りて報明」せよと再三にわたって「嚴令」され、遂に「兩船の帶來せる公納銀兩は共に五萬兩あり」と再報告せざるをえなかった事例に即して、琉球側では貿易銀兩をめぐるトラブルが表面化した際の對處方法を、清國や薩摩との摩擦回避という視點から慎重に模索・検討している。⁽⁴⁷⁾貿易擴大の欲求と體制維持の要請を兩立させる方策が模索されなければならなかったのである。

一年四貢を年末にまとめて進貢することになっていた朝鮮國の場合、進貢品には宗主國への儀禮と敗戰國の賠償という二種類の「歳幣」の意味が含まれていたことから、進貢品が回賜品を上回り、「厚往薄來」の常例に合致せず、その限りでは朝鮮側の負擔加重であったと言われる。⁽⁴⁸⁾けれども、清國側は朝鮮進貢使節に認められた輸出入貿易品に對しては琉球の場合と同様免稅の優遇措置を採ったこと、但し朝鮮當局の側で課した輸出入税が嘉慶・道光期には年平均六萬餘兩にも達し、朝鮮人參の輸出に課される「包參税」とともに、朝鮮當局の重要な財源となったこと、さらには清國內における朝鮮人參の需用増大にともなつて私商の密貿易の増大、銀兩の朝鮮側への流出を引き起こし、アヘンとともに朝鮮人參が銀

流出の原因となつたと指摘されていることにも注目すべきであらう。⁽⁴⁹⁾

二年一貢（但し四年に一度の陸路による貢使派遣）と規定された越南の場合も、道光期以降になると、貿易機會の擴大を求めて清國へ要請を繰り返すようになる。一八二九（道光九）年、越南の使者が臺風に漂着した廣東人の「生監を護送して」廣州へ到り、積荷を「售賣し並びに市を通じて貿易」したいと要請したのに對して、道光帝は「内地の生監」を救助・護送して來たことを「實に恭順嘉すべきに屬す」と稱贊し、「所有の帶來せる各貨及び將來せる出口の貨物は、均しく著して恩を加えてその納税を免ぜしめよ」と命じて、琉球の護送船貿易と同様の措置を講じつつも、他方では「該國王、海道より粵に來たりて市を通じ貿易するの一節に至つては、自づから當さに例に照らして駁回せよ」と指示して越南側の海上ルートによる貿易要請を拒否し、⁽⁵⁰⁾兩廣總督李鴻賓から越南國王へ、次のような上諭を傳達させている。

爾國王久しく藩封に列し、素より恭順と爲す。爾が國の地界は兩廣に毘連し、向きに内地の商民と陸路に貿易するの處所あり。貨物流通して利用に資するに足る。他國の遠く重洋を隔てて必ず須く航海載運すべき者の比すべきには非らず。⁽⁵¹⁾（中略）今、若し爾國王の請う所を允さば、誠に恐るらくは、各該夷の船隻偶々攪越濶入し、以て滋々事端を生ずるを致さん。爾國王に於いても諸多便ならず、轉じて體恤を示す所以には非らざるなり。是を以て、仍お爾國王をして舊章を恪守し（中略）各陸路より往來貿易し、庸て海道より前來する母からしむ。

琉球の護送船貿易を認めながらも越南の要請を拒否する理由について、道光帝は「他國の遠く重洋を隔てて必ず須く航海載運すべき者の比すべきには非らず」として、越南と琉球の違いを強調し、越南に對しては「舊章を恪守」することを「明白に宣諭」したわけであるが、同時に「制限を示す中に於いて、仍お撫綏の道を寓す」ことで越南を繋ぎ止める方策を採つたのである。

ところが六年後の一八三五（道光一五）年にも、清國商船の略奪犯「梁開發等三名」を越南で捕獲したと稱して、越南國王は「遣使して水路より粵に解りて審辨せしめ、並びに帶有せる壓艙の土物は銷售して例に違いて報税するを准されん

ことを懇^{ねが}う」と申し出るとともに、「咨呈」の中では清國から南下して越南の港に入港あるいは「海岸に停泊」中の米穀船を取締り、「各々盤詰を加う」などと述べて、暗に密貿易の取締と引き換えに海路貿易の許可を求めた。⁽⁵²⁾この件についての兩廣總督の上奏を受け取った道光帝は、前回と同様に、越南が「匪犯」を解送して来たことを「尙お恭順に屬す」と稱賛しつつも、「その咨呈内に、未だ粵に來たりて貿易せんと欲すとは明言せずと雖も、而れども詞を藉りて入口停泊すれば、また覬覦の心なきを保し難し」と洞察し、「漸を杜し微を防ぐべし」との見地から、「嗣後、内地の人犯を獲解せんとして、若し航海して來たれば、既に定制と符せず。また風濤の險を冒すべし。爾國王務めて須く舊例に恪遵し、近きに就きて内地の欽州地方に解交し陸路より轉解せしめ、再び遣使して海を涉りて解送する毋かれ」⁽⁵³⁾と命じていることに注目すべきであろう。ここには、貿易の擴大を志向する朝貢國の思惑と「定制」の枠組みを維持しようとする宗主國の決意が示されている。

四 歐米商船の動向と宗主國・屬國の對應

冊封進貢體制の枠組みのなかで、廣東貿易への「參入」を許されていた歐米商人の側でも、嘉慶・道光期には「定制」の枠組みを越えようとする試みが顯著となる。英商の婦人同伴と商館永住をめぐる廣東當局との衝突事件⁽⁵⁴⁾（道光二〇年）、商館前の馬頭周邊の柵建設をめぐるトラブル⁽⁵⁴⁾（道光二一年）などは廣東貿易システムへの不満の現れであった。

貿易活動を廣東省の廣州・澳門のみに限定され種々の制約下に置かれていた歐米商人たちは、東アジアへのキリスト教布教を目指す宣教師たちと提携しながら、活動領域を廣東以外へ擴大しようと試み、探險航海を名目に情報収集活動に乗り出した。⁽⁵⁵⁾とりわけ、イギリスの東印度會社所有船アーマースト號の動向は注目に値する。

東印度會社代表のリンゼイとその通譯官のギュッラフ、船長のリース大佐に率いられた英國船アーマースト號（乗船者七八名）は、一八三二（道光二二）年二月二六日に澳門を出港、同年九月五日に歸港するまでの半年餘の間、商業航路の調査

を名目として公然と清國の「定制」を無視し「特殊な使命」を帯びた航海を敢行した。その航跡は次の通りである。⁽⁵⁶⁾

澳門を出港したアマースト號は三月二六日に「廣東第二の海軍根據地」の南澳島へ紛れ込み、數日間緊張した情報収集活動を展開して詳細な軍事情報を入手した後、四月二日に福建省の廈門へ到り、廈門當局の再三の上陸禁止令を無視して廈門城内や附近の郷鎮へ押し入り調査活動を續行した外、廈門港を詳細に觀察して商船だけでなく最大の軍艦でも入港停泊可能な優良の港であることを確認している。次いで四月二日福州の閩江を遡航して上陸したリンゼイ等は、福州が中國茶の産地に近く理想的な輸出港であることを確認した外、福州附近の砲臺の大部分が修理されないまま長期開放置されていることを偵察した後、さらに北上して五月二日には浙江省寧波の甬江へ入った。慌てふためく寧波當局をしり目に、リンゼイ等は十餘日の間、鎮海砲臺などを詳細に偵察し、寧波が浙江省の重要港灣、商業交通の中心であるばかりでなく海防戰略の要地でもあることを確認し、六月二〇日には吳淞口へ到着、ここでも地方當局の阻止するのにも顧みず舟艇で黃埔江へ闖入し、直ちに上海縣へ到って多くの要求を突きつけ、故意に交渉を引き延ばしながら詳細な調査を續行し、吳淞口を出入りする船舶が多いこと、上海が極めて良好な通商港であることを確認している。

外寇と内亂が結び附くことを恐れて強硬策を採れない清國當局の足元を見透しつつ、アマースト號はさらに北上を續けて六月一九日山東半島の重要な軍港威海衛へ入り、ついで折り返し舟山列島から澎湖島・臺灣を経て朝鮮へ寄港した後、最後に琉球王國の那覇港へ寄港した。アマースト號の那覇寄港については、『球陽』に次のように記録されている。

本年（道光二年）七月二十七日、英吉利國の船一隻の漂來するあり。その船、那覇の洋面に收到して錠を抛つ。坐する所の人數は共計六十七名、内四十名は黑人、五名は華人なり。淹留するの間に、その請う所に據り、牛・羊・豚及び應に用うべきの物件を給發す。八月初二日（八月二七日）自ら駕回するを⁽⁵⁷⁾行う。

一週間の那覇滞在期間中、リンゼイらは偵察活動を展開した外、琉球當局に貿易を要求したけれども、無理強いすることなく琉球を離れ、九月四日に澳門へ歸着、半年餘の「調査航海」を締め括⁽⁵⁸⁾った。

冊封進貢體制の枠組みを踏み越えたアマースト號の動向に對して、宗主國の清國や屬國の朝鮮・琉球はどのように反應したのであるか。この間、清國朝廷が地方當局に繰り返し警戒を命じ、貿易を嚴禁したことは言うまでもない。アマースト號の福州停泊を知らされた道光帝は次のような上諭を下している。

閩省の南北の洋面は、向き^きに惟だ琉球國の船隻のみその往來を准し、其餘の洋船は概ねその停泊するを准さず。茲に該署督（魏元愼）の奏に據るに稱すらく、英吉利國の洋船一隻、五虎洋面に漂泊するあり、と。該省は向來外洋と貿易せず。豈にそれをして地に就きて貨物を銷售せしむるを容さんや。即^たえ風に遭いて槓索を損壞するに因るも、また應に趕緊に修理し迅速に斥逐して出境せしむべし。該管の將弁は壺江等の洋に在りて巡緝するに、未だ事に先んじて豫防する能わざれば、實に疎忽に屬す。閩安協副將の沈鎮邦、署閩安左營都司の陳顯生は俱に著して先に頂帶を摘去するを行い、勒して趕緊に驅逐せしめ、如し辦理善からざれば即ちに嚴參を行え。並びに該署督に著して該洋船の出境の日期を查明せしめ、實に據りて具奏せしめよ。⁽⁵⁹⁾

道光帝は一方で福州は琉球にのみ認められた貿易港であつて他の外國船を入港させてはならないと指示しながら、他方でアマースト號の福州寄港が「風に遭いて槓索を損壞するに因」という地方當局の報告の通りであつたとしても、「槓索」を修理して「趕緊に驅逐」せよと命じただけで、江戸幕府の「無二念打拂令」のような強硬手段は指示していない。もっとも、アマースト號が意圖的且つ計畫的に福建から浙江・山東へ北上し、朝鮮・琉球へ寄港して貿易を要求したことは前述の通りであるけれども、アマースト號の福州寄港を意圖的・計畫的とみなせば「定制」の破壊行爲として對處しなければならなくなることから、道光帝もアマースト號の寄港目的を察知しながら、表面上「遭風船」として對處せざるを得なかつたのであらう。

ところが、リンゼイらの公然の貿易要求に直面した朝鮮は、「正言もて拒絶」したことを清國の禮部へ報告している。この報告を受けた禮部の上奏文によれば、「朝鮮國の時憲書を領^うとり咨を齎すの官、該國王の咨文一件を齎到せり。査す

るに、英吉利の商船、該國に向かいて交易せんと欲するも、該國王は法度を恪遵し、正言もて拒絶せり。朝鮮國は本朝に臣服し、素より恭順を稱す。茲に英吉利商船古代島の洋面に駛入し、該國の地面に在りて交易せんと欲するを以て、經に該國の地方官、告ぐるに藩臣に外交の義なきを以てし、往復開導し、相い持すること旬餘、英吉利商船は始めて開去するを行う。該國王、謹みて藩封を守り、深く大義を明らかにす⁽⁶⁰⁾と指摘されている。朝鮮側が屬國としての「法度を恪遵し」「藩臣に外交の義なし」という立場から、リンゼイらの貿易要求を拒絶したことに對して、道光帝は朝鮮側の忠誠心を稱えつつ、「經に法を奉じて終始移らず、誠款嘉すべきに據り、宜しく優賚を加うべし。著して該國王に蟒緞二匹（中略）を賞賜せしめ、用て嘉獎を示せ⁽⁶¹⁾」と指示していることに注目すべきであらう。

朝鮮と同様に、琉球もまたリンゼイらの要求を拒絶している。けれども、琉球の場合は一方でリンゼイらを鄭重に待遇しつつ、他方ではリンゼイやギュッラフが流暢な中國語を用い、清國事情に明るいことを知って警戒心を強め、琉球の土地は瘦せていて貿易できる產物も少なく、外國との貿易は國禁となつてゐることを理由に擧げて、リンゼイらの貿易要求を婉曲に拒絶したのである⁽⁶²⁾。その際、清國との宗屬關係については全く言及せず、しかもアマースト號の琉球寄港について清國へ報告した形跡もないことに留意しておきたい。もっとも、リンゼイらは福州の港で見た琉球のジャンク船が那覇港に歸還していること、那覇港には日本船も停泊していることを目撃し、自ら日本人乗組員とも接觸していることから、清國と琉球の宗屬關係だけでなく、琉球と薩摩との關係についても認識を深め、琉球の兩屬的位置を確認できたものと思われる。

かくて、貿易の擴大という明確な意圖と計畫をもつて遂行されたアマースト號の探查航海は、宗主國＝清國への直接的
外壓となつただけでなく、屬國の琉球や朝鮮を包攝する冊封進貢體制自體への外壓を顯在化させる契機ともなつたことに
注目すべきであらう。⁽⁶⁴⁾

五 琉球冊封使の派遣と貢期改定問題

東アジアへの外壓が強まるなかで、宗属関係再確認のための儀禮、即ち冊封と進貢の意義は體制維持にとって益々重要となるけれども、他方では儀禮遂行のための財政的負擔等が宗主國と屬國のいづれにとっても重壓となった。琉球について言えば、冊封儀禮は東アジアの中の一國家として内外から認知されるための不可缺の條件であったことから、萬難を排しても遂行せざるを得ず、嘉慶年間には、一八〇〇（嘉慶五）年の尙溫冊封（正使趙文楷、副使李鼎元、一八〇八（嘉慶一三）年の尙瀨冊封（正使齊鯤、副使費錫章）と、僅か十年足らずの間でも二度の冊封儀禮を遂行したわけであるが、その都度莫大な財政負擔を強いられたことは周知の通りである。⁽⁶⁵⁾

アマースト號來航の翌々年、即ち一八三四（道光一四）年に隱居中であった尙瀨王が死去するや、琉球當局はまた世子尙育の冊封儀禮の準備に取り掛かり、冊封使一行の接待費用をはじめ冊封費用の捻出のために民間からの獻金を奨励した。琉球の正史『球陽』には、早くも翌年から「本國、將に冊封の大典あらんとす。その冊使を歡待するの需は、固より莫大の費に屬す。奈んせん、近年以來、冗費踵を接し、帑項極めて乏し。その需に至っては、則ち以て調備し難し。時に泉崎村の貝善繼金城筑登之親雲上唯紀（中略）等七名、銅錢各十六萬貫文を將つて、公に奉借するあり⁽⁶⁶⁾」という記事が現れ、以後、尙育冊封までの四年間、同趣旨の記事が頻出するようになる。

冊封費用が「莫大」の額に達したのは、四百名前後の冊封使一行の半年に及ぶ琉球滞在費用だけでなく、冊封使一行によって持ち込まれる大量の清國製品を買い取る費用が必要であったからである。冊封使滞在中の中琉貿易、即ちいわゆる冠船貿易⁽⁶⁷⁾は、冊封使一行にとっては航海のリスクに見合う利益獲得のチャンスであったけれども、琉球側にとっては最大の負擔となった。

清國側でも琉球冊封をめぐる負擔軽減の必要が認識され、尙育冊封のため林鴻年らが琉球へ出發する直前に、御史の帥

方蔚が「向來、琉球に出使するの諸臣、その隨從・家丁及び閩省より派往する護送の弁兵は、内地の貨物を携帯し、或いは商貨を包攬し、該國に前赴して價を昂め勸售せざるなし」と指摘しつつ、「現に琉球を冊封するの期に居れば、應に敕もて正副使臣に下し、家丁を嚴飭して私に貨物を帶ぶる無からしめんことを請う」云々と提言している。⁽⁶⁸⁾

帥方蔚の提言を受けて、一八三八（道光一八）年二月、道光帝は「使臣、外藩を冊封するには、原より當に家丁を約束し滋擾するを許すなかるべし。派出する護送の弁兵に至っては、素より該使臣の所屬に非ざれば彈壓尤も難し。儻し敢えて私に貨物を携え勢に倚りて邀求すれば、甚だ外藩を體恤するの意に非らず。且つ中國の體制と關わるあり。嚴しく查禁を行わざるべからず」との觀點から、琉球冊封をめぐる從來の「陋習を除きて擾累を免れしめよ」と命じている。⁽⁶⁹⁾にもかかわらず、「陋習」が除かれなかったことは言うまでもない。

林鴻年・高人鑑を正副使とする冊封使節の一行は、一八三八（道光一八）年五月に琉球へ到着し、約五カ月の滞在期間に尙瀨王の諭祭、尙育王の冊封の儀式を済ませ、貿易の交渉も決着して同年一〇月には歸任したが、その翌年即ち道光一九年三月二四日、道光帝は次のような貢期改定の上諭を下すに至った。

向來、越南國は二年一貢たるも四年ごとに遣使して來朝すること一次にして、兩貢を合して並進す。琉球國は歲を間て一貢す。暹羅國は三年ごとに一貢す。各該國に在りては誠を抒べて順を效し、敢えて告勞せず。惟だ念うに、遠道より馳驅し、塗は雨雪に載ちて期たる較や促られ、貢船頻仍たれば殊に以て體恤を昭かにするに足らず。嗣後、越南・琉球・暹羅は均しく著して改めて四年ごとに遣使して朝貢すること一次と爲し、用て朕が藩服を綏懷するの至意を示せ。⁽⁷⁰⁾

要するに、藩服の負擔軽減のために貢期を改定するという趣旨であるが、この上諭によって最大の影響を蒙るのは二年一貢から四年一貢に改定される琉球、次いで三年一貢から四年一貢へ改定される暹羅であり、越南は從來も四年に二貢併進であったから貢期自體には大きな變化はなかった。琉球を主要なターゲットにした貢期改定であることは、琉球冊封をめ

ぐる「陋習」除去についての帥方蔚の前掲上奏の中で、「外藩を嘉惠し、その貢期を寛め、その方物を略す」るは「萬國を綏んずる所以なり」と強調⁽⁷¹⁾されていることから推知されるであらう。

貢期改定の上諭が琉球へ届いたのは一八四〇年六月一日（道光二〇年五月一九日）のことである⁽⁷²⁾。二年一貢の規定に従って進貢船派遣準備の最中であつた琉球當局は大いに困惑し、その情報を薩摩藩へ報告するとともに、今後の對策を協議した⁽⁷³⁾。貢期改定阻止Ⅱ貢期復舊のための陳情使節派遣について薩摩藩の同意を得た琉球當局は、上諭を無視して舊規に従い、進貢使節と官生四名を北京へ派遣することにした外、貢期復舊請願の特使をも派遣することとし、向邦正（恩河親方）、鄭元偉（伊計親雲上、後の湖城親方）を選任する⁽⁷⁴⁾。

向邦正・鄭元偉らは出發に當たつて、三司官・攝政から連名による二通の「口達」⁽⁷⁵⁾を受け取つたが、その内容を摘記すれば次の通りである。

① 今回の貢期復舊陳情の任務は琉球のみならず薩摩藩にとつても極めて重大で、特使派遣については薩摩藩の承認をも得ていること、

② 琉球にとつては、二年一貢でさえも「閒遠」いのに、四年一貢となれば清國の「御徳化」に沐する機會が少なくなること、

③ 二百年間も繼續してきた二年一貢の貢期を今になって改定されるのは納得できず、他國に對しても「御外聞」が悪いこと、

④ 薩摩や琉球の「御用物モ是迄之様不相調」、必ずや支障が生じ、遂には「國土之難題」にもなる可能性が懸念されること、

⑤ 以上の點を深く理解し、福州到着次第、直ちに咨文を提出し、福州當局と内密に相談すること、

⑥ 福州當局への請願に當たつては、薩摩藩の許可を得て用意した「遣銀」（工作資金）を持参させるので、適當な時期を

見計らって關連部局へ差し出すこと。

以上のような三司官らの「口達」による訓令を受けた特使の向邦正・鄭元偉らは、進貢正副使の向國鼎・林常裕らとともに、國王尙育の咨文を携えて同年一〇月一八日那霸港を出發、十一月一日福州琉球館へ到着するや、翌日には布政司衙門へ國王咨文⁽⁷⁶⁾を提出した。咨文には琉球が二年一貢を必要とする理由について、七點にわたって詳述されている。即ち、

①琉球にとっては「聖朝の徳化に沐する」機會の保障が「治安」上必要であること、②琉球の進貢の年には「貢風」が吹くお陰で農作物の被害が少なく、從來、二年に一度の「大熟」を享受できたこと、③毎年の進接貢船を通じて時憲書^(曆)を受け取ることができなければ、「農桑の庶務」を處理することができないこと、④琉球には藥材がなく、進接貢船を通じて清國から取り寄せるのでなければ治療に差し支え、人命に關わること、⑤航海知識に詳しく航海技術に「習熟」した人材を養成するためには經驗を積む機會が必要であること、⑥先祖代々繼續してきた二年一貢を改められては體面にかかわり恥辱であること、⑦琉球國王は海に隔てられて「登朝」できず、陪臣派遣の機會を通じて「天顔」拜謁の「思慕」を遂げたいこと、以上である。

ここには、宗屬關係の枠内で宗主國を説得するための屬國側の「論理」が總動員されているけれども、前掲の三司官らの「口達」に示唆されているような貿易の機會を減らされては困るという「本音」は巧みに隠されていることに注目すべきであらう。

琉球國王の咨文は福建布政使から福建巡撫の吳文鎔へ轉送されたが、吳文鎔は署福州府知府史致藩と署福防同知褚登らに自ら琉球館へ赴いて「逐細に譯詢」するよう命じた。史致藩・褚登と琉球特使らとの交渉経緯は特使鄭元偉の「家譜」に記録されているが、その概要は次の通りである。⁽⁷⁷⁾

史致藩・褚登「上年、皇上旨を降し、越南・琉球の二國を將て改めて四年一貢と爲し、暹羅國は改めて五年一貢と爲す。理として應さに凜遵し、下年の貢期を俟て閩に來るべし。今、何の緣故ありて閩に來たるや」。

向邦正・鄭元偉「敝國久しく天朝の厚恩を荷けなくし、會典に遵依して二年一貢すること、已經に一百餘年なり。若し改めて四年一貢と爲さば、則ち咨文に陳ぶる所の如く、不便あること多し。大老爺より撫院大人に稟明し、情に據りて具題せしめられ、舊に照らして二年に一貢し、貢使の向國鼎等をして上京して聖禧を叩祝せしむるを恩准されんことを懇求す」。

史致藩・褚登「所有の閩に來りて貿易するの一案は、舊に照らして定めて二年一次と爲し、その貢使の上京するの一案は、旨に遵いて改めて四年一次と爲さば、則ち之を如何とするや」。

向邦正・鄭元偉「敝國専ら舊制に遵依して隔年上京し、仰いで天朝の教化に沐し、國を治め民を安んじ、永く太平を享けんと欲す。若し四年に一次上京すれば、則ち化に沐すること漸く遠く更に不便あり。その貿易の一案に至っては、貨物を順帶して緞疋・藥材等の件を變買するに過ぎず、別に私利の意なし」。

史致藩らと向邦正らの交渉は實際には長時間にわたったが、交渉の要點は以上の對話の中に盡くされている。ここで注目すべき點は、第一に史致藩らが琉球の進貢使派遣を上諭違反として詰問していること、第二に史致藩らは琉球説得のために妥協案として從來の越南の規定を準用する案を提起したこと、第三に向邦正らはいくまでも舊規復活に固執したことであらう。

史致藩らと向邦正らの交渉經過の報告を受けた福建巡撫の吳文鎔は、十一月三日（道光二〇年一〇月二〇日）の日附で、特使向邦正らの「情辭を察核するに、極めて眞摯なり。その閒歲一貢を准すべきや否や、抑も應さに上年の諭旨に遵いてそれをして四年に朝貢一次たらしめ、現在齎到せる方物は留めて四年一次の例貢と作すを准し、その帶びる所の貨物は即ち館を開きて貿易するを豫^よすべきやの處は、伏して聖裁を候⁽⁷⁸⁾つ」と上奏している。

工作資金を用いて吳文鎔上奏の底稿を入手した琉球特使の向邦正らは、「（吳文鎔は）球の爲めに照料するの意あり。然りと雖も禮部の大人また將た如何に議奏するや、若し籌畫を爲さざれば萬全の計に非らず」と判斷し、なお北京の禮部當

局を動かす方法を模索した結果、書簡を作成して「閩人の舉人季培芳に托し、密に京に在るの工部主事鄧承恩に寄り、禮部衙門主客司の書辦等に轉請して」、適切な對應措置を採らせることに成功した。⁽⁷⁹⁾ むろん、この間にも相當額の「遣銀」(工作資金)が投入されたであらう。

かくて、四〇年二月十五日(道光二〇年二月二日)、道光帝は「吳文鎔の奏に、琉球國遣使して閩に來たり、舊に照らして閒年進貢せんことを籲請するの一摺あり。(中略)情辭極めて眞摯たり。著して請う所の如く行え。所有の該陪臣の子弟四名は、その貢使に隨同して北上し、入監讀書せしむるを准せ」との上諭を下し、琉球側の貢期復舊要請を全面的に承認するに至った。

冊封進貢體制の重要な變更を意味する貢期改定を一旦斷行しておきながら、まもなく琉球の貢期復舊を承認した清國側の政治判斷の背景にはどのような事情が隠されているのかという點については、なお検討の餘地が遺されているけれども、琉球に関する限り、貢期改定問題は期待通り決着したわけである。その結果、上諭違反として詰問されながらも福州に滞在していた向國鼎・林常裕らの進貢使一貢は、ようやく上京を許されて福州を出發した。⁽⁸²⁾ アヘン戦争のさなかのことである。

II アヘン戦争のなかの琉球と福州

一 戦争勃發とインディアンオーク號事件

貢期改定の上諭をめぐる福建當局と琉球特使の交渉が展開された時期は、アヘン戦争の勃發の時期と重なっている。⁽⁸³⁾ アヘン戦争は清國と琉球の宗屬關係にどのような影響を及ぼしたのかという視點から、戦争勃發から終結に至る期間の中琉關係に注目するならば、まず第一にアヘン戦争勃發時點における英艦隊所屬輸送船インディアンオーク號の琉球「漂來」

(84) 事件が、再検討の対象として浮上する。

周知のように、一八四〇年六月に廣東へ到着した英國の遠征艦隊はまもなく廣東から北上し、四〇年七月三日厦門を砲撃、續いて五日には定海を占領して舟山島を管理下に置くに至った。舟山占領作戦に参加した英艦隊所屬の輸送船インディアンオーク號(以下、オーク號と略稱)は、八月一〇日特命により舟山島を出帆して南下したが、翌日から四日間臺風に翻弄されながら漂流の末、一四日に沖繩本島の北谷海岸で座礁、インド人五五名・廣東人二名を含む乗組員六七名は、琉球側の救助活動によって全員救出され、以後四六日間にわたって手厚く待遇されることになる。⁽⁸⁵⁾この間の事情を詳細に記録したオーク號の「輸送責任者」ボーマン(J. I. Bowman)の日記には、次のような事實が指摘されている。

①琉球當局は多數の住民を動員してオーク號乗組員を救助した外、短期間に長屋二棟を建設して宿舎にあて、毎日充分な衣食を提供したこと、

②百名前後の住民が大砲二門や多數の武器を含むオーク號の積荷引上げ作業に連日動員され、一七樽の火薬を收容するために、琉球當局は新たに火藥庫も建設して提供したこと、

③ボーマンらは歸還方法について琉球當局と協議し、二ヶ月以内にジャンク船を建造するという琉球當局の提案を受け入れたため、琉球側は晝夜兼行でジャンク船の建造に取り掛かったこと、

④他方でボーマンらはオーク號から引き上げた大型ボートに一名の兵士を乗り込ませ、舟山島へ派遣して救援を要請する計畫をたて、難色を示す琉球當局を説得したこと、

⑤大型ボートが出發する直前に、三百名前後の薩摩兵を引き連れた薩摩の役人たちがボーマンらを訪ねてきて、大型ボートの出發を阻止しようとしたが、大型ボートは制止を振り切って出發したこと、

⑥大型ボートが出發してから一六日目に、オーク號の遭難者を載せ歸るため、舟山島から派遣された英艦ニムロット號とクルーザー號がユニオンジャックを掲げて那覇港へ到着したこと、

⑦琉球ジャンク船の必要性はなくなったけれども、琉球側の厚意を受け入れて建造中のジャンク船を使用させて貰うために、クルーザー號は先に舟山へ向かうことになり、オーク號の遭難者は一日後の九月二十九日にニムロット號と琉球ジャンク船に分乗して舟山へ向かったこと、等々である。

以上のようなポーマンの「日記」の内容によれば、インディアンオーク號事件は東アジアの伝統的な國際秩序を揺るがしかねない問題を提起していたことになる。

第一に、琉球は清國との宗屬關係を無視して、莫大な財政負擔を強いられながらも、清國と戦争中の英國人を手厚く待遇し、ジャンク船を建造して再び戦場へ送り返しているからである。琉球當局は英國が清國と戦争中で、遭難漂着したオーク號が戦争参加の英國艦船であることを知らなかったのであろうか。むろん、琉球は福州との往來によって最も早く情報を手し得る位置にあり、アヘン戦争勃發の情報も逸早く入手していた。ポーマン自身が「彼ら（琉球當局）は、中國沿岸に軍隊を乗せた英國船（復讐）がいたが、厦門で前者（英國軍）は中國人に打ちまかされたことを聞いたと話してくれた」⁽⁸⁶⁾と書き記していることから、琉球當局が英國艦隊の厦門砲撃の情報をキャッチし英國と清國の戦争の推移に關心を向けていたことは明らかであろう。にもかかわらず、琉球が「敵國人」を手厚く待遇したことは、客觀的には宗主國への背信行爲ということになる。しかし、琉球當局にとっては、英國人の不興を買って後日の難題を招くよりも、オーク號遭難者を一日も早く平穩に退去させることが「自國の安全」⁽⁸⁷⁾のために必要とされた。宗主國への忠誠よりも當面の「自國の安全」が優先されたのである。

オーク號事件が提示した第二の問題は、幕藩體制下の薩摩と琉球の矛盾である。ポーマンの指摘によれば、琉球當局はポーマンに對して「トゥカラ人（薩摩人）は質が悪い」などと告げて薩摩人への露骨な反感を示し、薩摩人の取り調べを回避するために武器の隠匿を勧めたり、薩摩の意向とは關係なく大型ボートの出發に協力したという。確かに、鎖國制の規定を遵守しようとすれば、琉球當局の對應の仕方には問題があった。この時點では、江戸幕府の無二念打拂令⁽⁸⁸⁾は琉球で

も遵守されるべき法令であつたからである。

「自國の安全」を優先する琉球當局と幕府法即ち「打拂令」を遵守しようとする薩摩當局の閒には一定の矛盾が存在したことは事實であらう。しかし、薩摩のコントロールを離れて琉球独自の對應策を採り得る可能性は極めて限定されていたことにも注目しなければならない。この閒の琉球側の對應については、英語の通譯としてポーマンとの交渉に當つた東順法（安仁屋政輔）の功績に對する琉球三司官の表彰文に次のように記されている。

今般、北谷閑切浦江阿蘭陀船漂着、船相損、修補不致者歸國難成、異國人長々令滯留候而者、萬反國土之煩不輕事ニ而、早目修補相調、歸國させ候様取計無之候而不叶事候處、右船修補一件相談ニ付而者、乗合之唐人共ニ茂官話文字等然々存不申、尤官音聞達候丈ケ茂阿蘭陀人江之通詞相厭申牀ニ而、差支候處、其万事（東順法）兼而阿蘭陀言葉大牀存居候故、阿蘭陀人江直談相遂、船修補相調置候。然處迎船來着、右船より里歸國、修補船者不用可致由申立有之、其通相成候ハヽ、御在番所御都合旁故障之儀共有之候處、是又相談を以、修補船より里歸國之方江令落着、其外時々事煩數申立等有之候得共、機變ニ應ジ、都而之通詞事能相辨、早々令歸國、（中略）旁以拔群之働、殊勝之至候云々。⁽⁸⁹⁾

ここでは、琉球側がオーク號遭難者の長期滯留を「國土之煩不輕」と受け止め、薩摩藩の出先機關の在番奉行所とも協議の上で、早期歸還の方法としてジャンク船を建造したこと、折角建造した琉球ジャンク船が救助目的の英艦二隻の到來によつて不要となつた時點でも、琉球當局は薩摩側の意向を受けて琉球ジャンク船を使用するよう英國側と交渉し認めさせたことに注目すべきであらう。琉球の對應は薩摩藩の支配の枠組みを越えるものではなかつたのである。しかし、薩摩當局が琉球當局の對應を容認あるいは默認していたとすれば、これまた幕藩體制を揺るがす違反行爲であつて、薩摩藩自體の對外政策も現實の「外壓」の前に軌道修正を餘儀なくされていたと言えよう。かくて、インディアンオーク號事件は冊封進貢體制だけでなく、幕藩體制へも重要な一石を投じたことになる。

二 戦争の繼續と英國艦船の琉球「寄港」

アヘン戦争勃發から一年後の一八四一年後半以降、新たに赴任したポッティンジャー率いる英國艦隊は再度閩浙への戦線擴大を圖り、短期決戦によって一氣に清國當局を屈服させる戦略を採用し、⁽⁹⁰⁾壓倒的な軍事力を背景に沿岸主要都市の攻略に成功したものの、短期間に戦争を終結させることはできず、戦略據點を維持し続けることも容易ではなかった。一部の清國軍の果敢な抗戦に加えて、民衆の抵抗が豫想以上に強かったことも一因であらう。

四一年八月二六日に厦門を攻撃占領した英國艦隊は、周辺の砲臺や大砲を徹底的に破壊しながらも、陳氏の率いる五百名の義勇兵の抵抗に遭って九月四日には全軍厦門から撤退し、對岸の鼓浪嶼に軍艦三隻・輸送船三隻に陸兵五百名のみを留めたまま北上を續けたが、鎮海・寧波戦役でも「黒水黨」の組織する民衆の武装部隊に攪亂されるなど、各地で民衆の抵抗に直面したと言われる。

また戦争の繼續に伴う英國兵の犠牲も少なくなく、四一年九月三〇日には臺灣の基隆附近で座礁した英國艦船の印度兵一三〇餘人が捕獲され、翌四二年三月一日も同じく臺灣の大安港で座礁した英國船の五二名が捕虜となって慘殺された。⁽⁹³⁾また同年二月一八日には浙江の寧波附近で淺瀬に乗り上げた英國輸送船イナ號の船長が捕獲された外、英國軍の寧波占領期間に四二名もの英國兵士が清國側の捕虜となっている。鎮江占領後の英國軍は民衆のゲリラ戦術に悩まされ、「いつも攻撃に反撃する準備をしていなければならず、そのためまったく休息がとれなかった」という。⁽⁹⁴⁾

その上さらに、疫病の蔓延、生鮮食料品の不足等も英國兵を悩ませる要因であったと思われる。一八四一年七月に定海を攻撃し舟山島を支配下に置いた英國軍の場合「七月一三日から一二月三一日までの期間に、一部隊四〇〇〇名未満の構成にかかわらず、入院の必要を認められた者は五三二九名、死者は四四八名」に達し、「一一月には、多數の病兵はマニラへ送られたけれども、スペイン當局が彼らに上陸許可を與えることを拒絶したことから、彼らは香港へ連れていかれ

(95) 香港は前線に近く危険性をともなったけれども、既に英國艦隊の占領下に置かれていたから當面の避難地として利用されたわけで、戦争が長期化すれば、英國艦隊にとって安全な後方基地を確保する必要性は益々増大したであろう。

東アジアにおける戦略的な後方基地の確保という將來的課題の外に、當面、直接の戦場となった清國の沿岸地帯の外で生鮮食料品を確保することも、英國艦隊にとって重要な課題となったようである。アヘン戦争の期間に、英國艦船と思われる異國船が琉球近海に頻繁に姿を現すようになったのも、その例證であろう。『球陽』には次のような事例が記録されている。

① 「道光二年、一八四二年」四月朔日申の刻、阿蘭陀船一隻の馳せ過ぐるあり。その船、知念郡の三里許りの洋面を、卯辰の方に向かいて馳せ往くの時、人數二十名は杉板三隻に坐駕して久高島に搖來し、鶏を求むるの模様あり。隨いで鶏一隻を給したれば、即ちに本船へ駕回し、酉末の刻に至って、駛して巳午の方へ過ぎたり」(96)

② 「道光二年、一八四二年」四月三日午の刻、久米仲里郡に異國船一隻の漂來するあり。その船、駛して島尻大口の二里許りの洋面に來たりて灣泊す。人數十五名は杉板二隻に坐駕し、島尻の濱に掌ぎ來り、走りて村内に入り、牛・羊・鶏を求むるの模様あり。隨いで鶏一隻を給するも、收領するを肯んぜず。走りて田野に到り、野飼いの牛一口・羊二口を劫奪す。島尻村より掌ぎて伊保濱に赴く。その土民、手を用いて早く回れと示す。隨即到本船へ駛回し終夜灣泊せり。翌朝、南方に向かい進む」(97)

③ 「道光二年、一八四二年」四月十四日酉末の刻、阿蘭陀船一隻の漂來するあり。その船、讀谷山郡宇座村の洋面に泊錠す。人數十名は杉板二隻に坐駕し、掌ぎて該濱に到り、未だ幾くもせずして本船へ駕回し、亥子の方へ向かいて駛し去る」(98)

④ 「道光二年、一八四二年」四月十七日未の刻、久米仲里郡に大船二隻の漂來するあり。その大船二隻、波手口二里許りの洋面に駛し到る。人數十三名は杉板二隻に坐駕して伊保濱へ掌ぎ來り、牛・羊を求むるの模様あり。隨いで牛一

口・羊一口を給したれば、即ちに本船へ掌ぎ回る。大船一隻は次日辰の刻に、酉戌の方へ駛し去る。一隻は本日巳の刻に、儀間大口の三里許りの洋面に駕し到る。人數二十二名は杉板三隻に坐駕して兼城濱に掌ぎ來り、また牛并に蕃薯・蔬菜等の項を求むるの模様あり。隨いで牛一口・蕃薯・蔬菜等の項を給したれば、その二隻は即ちに本船へ向かい去る。その一隻は轉じて具志川郡兼城濱に駛す。該郡もまた牛一口・羊一口・蕃薯・蔬菜等の項を給したれば、隨即に本船へ歸る。本日申の刻、駛して午の方へ去る。⁽⁹⁹⁾

⑤「(道光三二年、一八四二年)五月二十日未の刻、渡名喜島に阿蘭陀船一隻の漂來するあり。その船、瀬原の一里許りの洋面に駛し到る。人數二十七名は杉板四隻に坐駕して西の濱に掌ぎ來り、牛・羊・蕃薯を求むるの模様あり。隨いで牛一口・羊三口・蕃薯五十斤を給したれば、即ちに本船へ回る。黄昏に至り、戌の方へ向かい去る。⁽¹⁰⁰⁾」

いわゆる「阿蘭陀船」とは異國船即ち歐米船一般を指すけれども、アヘン戦争以前に琉球近海へ姿を現し寄港した「阿蘭陀船」の内、一八三七年の米商船モリソン號以外はすべて英國船であること、一八三二年のアマースト號の寄港やアヘン戦争勃發時點でのインディアンオーク號「漂着」によつて、英國側は琉球情報をかなり正確に把握していたと思われること、アヘン戦争以前の「阿蘭陀船」「異國船」は直接那覇港へ入港して寄港目的を告げているのに對して、四二年前半の場合はいづれも那覇港には入港せず、琉球諸島の沖合に停泊したまま、何名かの異國人たちが渡船で上陸し、牛・羊・鶏・野菜・蕃薯などの生鮮食料品を要求して手に入れ、あるいは「劫奪」して本船へ持ち歸っていること等の事情を考慮すれば、アヘン戦争の最終段階、即ち一八四二年の前半に頻繁に琉球近海へ姿を現した「阿蘭陀船」「異國船」が、通常の航海船ではなく、アヘン戦争を展開中の英國艦船であつて、その琉球「寄港」の目的が生鮮食料品の調達にあつたことは明らかであらう。

琉球當局が宗主國の清國と戦争中の英國艦船であることを承知していたのかどうかは明らかではないけれども、この時期の異國船の琉球「寄港」について、琉球當局は宗主國の清國へ全く報告していないという事實に留意しておきたい。琉

琉球當局は異國船即ち英國艦船の動向を默認せざるを得なかっただけでなく、琉球の民衆もまた異國人即ち英國人の要求に應じて貴重な家畜等が無償で提供せざるを得なかったわけで、アヘン戦争の餘波は確實に琉球列島へも押し寄せつつあったのである。

三 中英講和交渉と福州「開港」問題

清國のなかでも琉球と最も密接な關係にあったのは福州であるが、福州はアヘン戦争の渦中で直接戦火を蒙ることはなかったものの、講和交渉の過程ではたえず「開港」の對象として浮上した。戦闘と交渉の繰り返しを特徴とするアヘン戦争のプロセスにおいて、前半の戦闘の結果は川鼻假條約に歸結するけれども、一八四〇年の年末から四一年初頭にかけての琦善とエリオットの交渉の中で、エリオットが焼却アヘン代金の返済、香港割讓とともに廣州・廈門・福州の開港を要求したことは周知の通りである。⁽¹⁰²⁾

エリオットとの交渉経過について、琦善は道光二〇年二月一日附の上奏文⁽¹⁰³⁾のなかで、エリオットが廣東の大嶼山と香港に「垂涎」していることを指摘するとともに、「その貿易の馬頭の一節は、また仍お廣州の外に、或いは福建、或いは浙江、或いは江蘇、此の三省中に於いて、通商の二處を酌准せんことを請い、並びに寓居するの所を酌豫せんことを請う」と報告している。

エリオットが福建・浙江・江蘇の内二カ所に開港場を要求していることについて、琦善はさらにその對應策を提言した。即ち、「糸綿茶葉」の産地の浙江・江蘇よりも、福建の廈門と福州を開港場とする方が得策であるという提案である。その理由として琦善が強調したのは、①廈門・福州は從來からの貿易港で、特に福州には閩海關があり琉球人の居住・貿易を許された所である、②英國人にも琉球人と同様に居住・貿易を許せば土地の割讓を避けることができる、③臺灣との間にも一定の距離があり防衛上も「駕馭」し易い、④現在軍事情勢は緊迫し、閩洋でも泉州の大墜洋でも英國艦隊

が遊弋中で、要求を認めない場合には勝手に入り込んで「漢奸」と交易する危険性がある等々の諸點であつた。ここではとりわけ、琉球向けの貿易港として歴史的に開港場の機能を果たしてきた福州の位置が見直されていることに注目すべきであろう。

かくて、琦善は「奴才、擬して廣州の外に於いて、再た福建の厦門・福州の兩處に就きて、通商せしむるを准し、藉りて以て羈縻するを得んことを冀う」と上奏したわけであるが、さらに同日附の「片奏」においては、厦門・福州の開港を許可された場合を前提として、英國商人からの徵稅方法とその徵收關稅の使途について次のように提言した。

所有の英夷に酬給するの洋銀六百萬圓は、勢い資を商力に藉らざる能わず。(中略)現に既に擬して福建の厦門・福州に於いて、英夷、前往して貿易するを酌准せんことを請う。如し恩允を蒙らば、則ち既に經に通商せしむるからには、即ち當さに例に照らして徵稅すべし。査するに、該省には向きに閩海關を設有し、福州將軍の管理に歸す。所有の厦門・福州等の處の商稅は、均しく已に此に就きて徵を經る。該處には向きより琉球國の夷人あり、彼に在りて貿易し、歷久して恭順たり。その一切の應さに徵すべきの稅課は、自づから舊章あれば庸て更に議するなし。所有の新たに添ずるの英吉利國の夷商は、自づから應さに粵海關の例に倣照せしめ、課額を酌定すべし。(中略)上は以て國課に充つるに足り、英夷に酌酬するの銀款はまた量りて分攤を爲すべからしむれば、則ち彼を括みて茲に注ぎ、特に並行して悖らざるのみならず、且つ粵東の助と爲すべきに庶からん⁽¹⁰⁾。

要するに、厦門・福州における「洋商」を對象とした關稅は、琉球の「舊章」を改定することなく「粵海關の例」に従つて徵收し、「英夷に酌酬するの銀款」にも充てるといふ提言であるが、道光帝はこの提言を「寓目に値せず」と一蹴している。しかし、エリオットはアヘン代金の賠償や香港割讓を要求して止まず、琦善に最後通牒を突き付け、四一年一月七日の早朝には、沙角・大角の兩砲臺を攻撃する等の威壓を加えたことから、琦善は上諭を奉ずることなく獨斷で、同年一月二〇日に香港割讓を含む川鼻假條約を締結するの已むなきに至つた。

香港割讓を認めた川鼻假條約は清國皇帝の怒りを買っただけでなく、英國政府からも獲得成果が少ないとして否認され、琦善とエリオットが共に罷免される結果を招いたこと、⁽¹⁰⁶⁾周知の通りである。四一年の後半以降、エリオットに代わって英國全權代表となったポッティンジャーは、英國艦隊を率いて戦線を閩浙からさらに長江下流域へと擴大し、四二年六月以降の最終局面において、壓倒的な軍事的壓力を背景に、清國側の耆英・伊里布らとの講和交渉に入ることになる。⁽¹⁰⁷⁾

長江停泊の英艦コーンウォリス號上におけるポッティンジャーらとの交渉の結果、香港の割讓・五港の開港・賠償金支拂い等の合意に達した條項について、耆英・牛鑑・伊里布は連名で道光二二年七月一日（四二年八月二日）附の上奏を提出し許可を求めたところ、道光帝は「億萬生靈の繫ぐ所、實に天下の大局に關わるに因り、勉めて請う所を允し藉りて一勞永逸の計と作さざるを得ず」と承認の意向を示しつつも、「商する所の各案内には應さに籌酌を行ふべき處あり」と指摘して、「その前に請うの通商貿易の五處、福州地方は萬豫すべからず、或いは別に他處を以て相い易うるを除くの外、その廣州・厦門・寧波・上海の四處は均しくその來往貿易するを准せ」との上諭を下している。⁽¹⁰⁸⁾

上諭を奉けて耆英らは英國側と福州開港について再度協議したけれども、その交渉経過を報告した耆英らの上奏文によれば、英國側全權はなお要求を堅持し、「福州に至つては乃ち武彝茶の聚集するの所なり。また海關を設有し、貨を販し税を納めしむるは最も便なるに屬するに係る。且つその地には舊くより琉球館あり。渠等の事は同一の例なり。是を以て、恩を施すを籲請せり。今、大皇帝、駁飭して准さざるも、仍お格外に恩を加え、諭するに他處に相い易うるを以てするを蒙る。惟だ天津は京都に密邇すれば、渠等敢えて妄りに請求するあらず。此の外の濱海の區にして茶を販するに最も便なるは福州に過ぎるなし。且つ中國の極南の地に係り、廣州の情形と相い等し。仍お大皇帝の恩准して賞給するを求む」と主張して譲らなかつたという。⁽¹⁰⁹⁾

英國側は福州が武彝茶の集散地であること、福州には琉球人の貿易據點＝琉球館があることに注目し、琉球人と「同一の例」として貿易の恩典を與えるように要求し、福州の開港に固執したわけであるが、道光帝が最後まで福州の開港を避

けようとしたのも、「その地には舊くより琉球館あり」、福州の開港が清國と琉球の宗屬關係に影響を与えることを懼れたからであろう。しかし、英國側の要求を受け容れざるを得なかった者英らは、次のように辯解している。——「武彝茶は建寧より産し、福州に聚り、西洋諸國に行くは最も遠しと爲す。該夷、茶を販するに因りて、福州に往きて貿易する者求むるは、尙お實情に屬す。福州の形勢を考うるに、廣州とともに海疆の省會と爲る。諸を寧波・上海の蘇杭と逼近する者と較ぶれば、尙お輕重の分あるに似たり。若し堅く拒みて准さず、他處に易うるを許せば、該夷は既に天津を以て藉口すれば、誠に恐るらくは、また枝節を添ぜん」⁽¹¹¹⁾。

要するに、福州を拒否すれば英國側は天津を要求するだろうというわけである。福州か天津かと迫られれば、道光帝も首都北京に近接する天津を避けて福州を選択せざるを得なかったであろう。かくて、最終的には福州開港問題も英國側の要求通り決着し、英國全權と清國全權は四二年八月二九日南京條約に調印するに至る⁽¹¹²⁾。しかし、南京條約の發效による福州の開港は、道光帝が懸念したように、清國と琉球の宗屬關係に直ちに深刻な影響を与えることとなる。

結びにかえて——アヘン戦争後の外壓と琉球——

東アジアの傳統的な國際秩序を規定した冊封進貢體制は、嘉慶・道光期に入るや、進貢船等の相繼ぐ遭難事故、漂流・漂着船の急増、偽裝漂着と密貿易の増大、海賊集團の横行等の外、進貢貿易をめぐる宗主國側と屬國側の利害對立、冊封・進貢の儀式にともなう膨大な經費負擔の壓力等々に直面し、體制内の矛盾（體制維持のコストとリスク、體制攪亂要因等）の増大によって變容を餘儀なくされたこと、且つまたアヘン戦争前から戦争期間を通じての外壓によって、體制内の矛盾は増幅され、清國と琉球の宗屬關係に危険信號が點滅するに至ったこと、前述の通りである。

アヘン戦争の終結後、英國をはじめとする歐米列強は公然と東アジアの傳統的國際秩序の再編成に着手したことから、琉球もその渦中に引き込まれて對外關係の緊張を強いられ、冊封進貢體制を動搖させる直接の震源地とならざるを得なく

なる。ここでは、アヘン戦争直後の英國の動向と琉球側の對應について概括的に検討しておきたい。

アヘン戦争期間の講和交渉の過程で、英國側代表が福州の開港要求に執着し、福州の琉球館に注目していたことは前述の通りであるが、アヘン戦争に勝利して福州開港に成功するや、英國政府は直ちに琉球へのアプローチを開始した。アヘン戦争の延長線上において英國政府が着手した第一の措置は、英國軍艦サマラン號(H. M. S. Samarang)の派遣である。⁽¹¹⁾

アヘン戦争にも参加したバルチャー(Capt. E. Belcher)艦長の率⁽¹²⁾いるサマラン號は、英國政府の命を受け、清國航路とその周辺の地域の測量を目的として、一八四三年から一八四五年にかけて、清國沿岸・ボルネオ・フィリッピン・臺灣・琉球・日本・朝鮮等の廣範な海域と陸地を探索したが、この航海探索のなかで、琉球列島が重要な探索対象となっていたことに注目すべきであろう。サマラン號の琉球列島探索は前後三回に亘っている。第一回は一八四三年の一〇月から翌年にかけての先島(八重山・宮古)探索、第二回は四五年五月の石垣島・與那國島・宮古島を経て沖繩本島に至る琉球列島全域の探索、第三回は同年八月の沖繩本島(那覇)⁽¹³⁾への再來航である。

四三年のサマラン號の八重山探索の状況については、八重山島の役人から琉球王府へ提出された報告書⁽¹⁴⁾の中で、次のような注目すべき事實が指摘されている。即ち、

①卯年(四三年、道光三三年)一〇月一日サマラン號から「異國人九人、唐人壹人、都合拾人」が渡船で上陸して來たので、唐人の通譯に問い質したところ、「大英國之船、人數貳百六拾人乗組」み、「本國(英國)之受王命、諸國島々爲廻見罷通候」と答えたこと、

②英國船の來着や英國人の上陸は「不相成國法」であるので「屹度本船へ罷歸候様」通告したけれども受け附けず、遂に渡船から道具を取り出し、砂濱にテントを設營して三名を泊まり込ませ七名は本船へ引き上げたこと、

③翌日(二日)午前八時頃、艦長外一〇名がテントへ入り、「山地致見分度旨申出」たことから、「此之儀、不相成國法之段、申聞相斷候處」、艦長らは「本國(英國)皇帝之命を受」けて來たので「是非見分させ」るようにと強硬に主張

し、八重山役人らが「此國之法令嚴重にて、曾つて難差止段申達し候得共、聞濟無之、英國人は境界相替し、變事差起候様相見得」、雙方の間に緊迫した事態が現出したけれども、上司へ報告して回答を得るまで測量を延期して欲しいとの要望が受け入れられてひとまず危機を回避したこと、

④一四日には英國人たちが「牛並野菜」を要求してきたので、野菜はともかく「牛は小島困窮之所にて購ひ立少しく難達段、相斷り候處」、承知せず、「此上相斷候ては、何様不意之儀共可致やと、何れ吟味之上、小牛壹疋、野菜五拾斤相送候處」、喜んで受け取り、返禮として木綿壹疋を贈られたこと、

⑤測量の件についての回答を種々の口實を設けて延期していたところ、一五日午前一〇時頃、「英國人六人、唐人壹人」が上陸して来て、「何之掛合（相談）も無之、早々出立」したので、島人「多人數相集り、行先を遮り候へ共難差留、不意之働可致出來模様相見得」、仕方なく在番筆者以下の首脳部が多數の役人たちを引き連れて英國人らの測量を監視したこと、等々である。

サマラン號の琉球訪問の目的は海域や陸地の測量にあったものの、サマラン號には二百六十名もの乗組員を載せ、その内譯は「官人貳拾五人、兵貳百參拾四人、唐人壹人」であつたこと、また二六門の大砲を含む「石火矢、鐵砲、其外武具過分乗せ付」けていたことから、傳統的な國際秩序Ⅱ冊封進貢體制を眼中に置かない態度を明示しつつ、萬一琉球側からの抵抗に遭遇すれば武力威嚇の手段を用いても目的を遂行するつもりであつたと見るべきであろう。事實、八重山現地役人の報告に明らかなように、サマラン號の乗組員は琉球側の抵抗を排除して強引に測量を強行したことから、かなり緊迫した事態も現出したわけで、琉球側でも「右異國人之儀、累年之漂着人と相替」⁽¹¹⁾わり、明確な目的を持った侵入者として受けとめざるを得なかつたのである。

八重山・宮古から沖繩本島全域に亘り三回も繰り返されたサマラン號の探查は、アヘン戦争後の外壓がストレートに琉球列島へ加わりはじめたことを意味し、琉球當局だけではなく冊封進貢體制全體を震撼させるに足るインパクトとなつた

と言えるけれども、琉球側はサマラン號の琉球探查を宗主國の清國へ直ちに報告したわけではない。一八三二年のアマースト號來航の際と同様に、琉球當局は今回のサマラン號の來航も清國へ報告することなく、自力で對處するつもりであったと思われる。しかし、アヘン戦争を経た後の外壓は琉球獨自の外交努力で乗り切ることのできない段階へ入りつつあった。サマラン號の琉球探查と同時期に、英國側は琉球當局へさらなる壓力を試みるに至ったからである。

アヘン戦争の延長線上において英國側が採った第二の措置は、福州の琉球館を通じて琉球當局へ南京條約の條文を送附し、通商を要求することであった。この間の事情について、『球陽』は「本年（道光二十四年、一八四四年）十一月十五日、福州城内の積翠寺に駐紮するの英吉利國領事の李太郭、文書一道を將って、閩に在るの在留通事魏學賢に交給し、本國官吏に轉じ傳えしむ」と前置きしつつ、長文の南京條約全文を掲載した後、最後に福州駐在の英國領事レイ (Lay, George Tradescant 李太郭) の次のような照會を採録している。

大英欽命領事正三品にして福州に駐紮するの李、貴國と兩相に和好せんが爲にす。本領事、よりて貴國の官民の平安を施さんことを願う。但、大英の戰船は常に往來して海盜を逞い、水度を探り地方を量りて圖を繪く。恐らくは貴國の官民、戰船を見て懼怕せん。今、特に文憑一紙を齎し來らしむ。若し船官水菜を要むれば、均しく價錢を約し、公道に交易されしむ。⁽¹²⁰⁾

福州駐在の英國領事レイが南京條約全文を琉球當局へ送附したのは、英國が琉球の宗主國＝清國と條約を締結した事實を知らしめ、暗に琉球とも通商したい意向を示すためであったと思われるけれども、照會文の限りでは、サマラン號の來航目的を通知し、乗組員に便宜を與えて「公道に交易」するよう要求するに止まっている。福州領事レイの照會文を受け取った琉球當局は周章狼狽し、「百官會議」した結果、翌年（四五年）三たび來航したサマラン號の艦長ベルチャーに對して、「備さに小邦を憐察せられ、本國の屬島を遍巡し地方を丈量するを停止されたし」との要請文を提出することとし、通譯の「華人へ傳給し、代わりて轉詳を爲さしめ」⁽¹²¹⁾た。その要請文は次のように指摘している。

切に査するに、上届癸卯の年、太平・八重の兩山の各地方官の報稱に據るに、偶々大英國の船隻到來し、多人にて上岸し、數十日の間、海を巡り山を環り、水の淺深を試み、地の廣狹を量る。英人に在りては經に禮ありと雖も、土民に在りては却つて是れ心驚き膽裂け、素業を抛棄し、その困疲を極む。(中略)伏して惟うに、敝國は叢爾の蜃疆にして、所屬の諸島もまた已に偏小の物産裕かならず、日食續き難し。風旱の災いに逢う毎に、益々苦窮の極みに至る。統て祈るらくは、大人、小邦の苦疲の痛むべきを洞察し、大邦の小を恤れむの仁慈を俯垂し、國を巡り島を環り地方を度量するの舉を停止せられんことを。⁽¹¹²⁾

琉球側の要請文を受け取ったベルチャー艦長は「隨卽にその請う所を允し」、「我等は明年正月の間に至つて、また貴國に來到せんと欲す。(中略)貴國の官民は宜しく驚怕するなかれ⁽¹¹³⁾」と言ひ残して琉球を離れた。しかし、その前後から琉球の對外關係はさらなる緊張を強いられた。英國艦船に續いて、佛國艦船が來航し、よりストレートに和好・通商・布教を要求し、開國を迫ったからである。

一八四五年八月に三たび來航した英國艦船サマラン號だけでなく、その前年に來航した佛國艦船アルクメーヌ號も、ともに再來航を豫告したことから、琉球當局は當面獨自で對應する方針を採りつつも、萬一の場合を考慮して宗主國の清國へこの間の經緯を報告するに至るけれども、琉球の對外的危機に清國側がどのように對應したのかを含めて、一八四〇年代後半以降の中琉關係の諸相、冊封進貢體制の動搖・崩壞過程の特質については別稿で検討することにした。

註

- (1) John King Fairbank: *The Chinese World Order*, Harvard University Press Cambridge, Massachusetts 1968. 西嶋定生『中國古代國家と東アジア世界』(東大出版會、一九八三年)。堀敏一『中國と古代東アジア世界—中華

的世界と諸民族—』(岩波書店、一九九三年)。唐代史研究會編『隋唐帝國と東アジア世界』(汲古書院、一九七九年)。田中健夫『中世對外關係史』(東大出版會、一九七五年)。荒野泰典『近世日本と東アジア』(東大出版會、一九八八年)。坂

- 野正高『近代中國政治外交史』（東大出版會、一九七三年）。
 濱下武志『朝貢システムと近代アジア』（岩波書店、一九九七年）。琉球中國關係國際學術會議編『第四回會議 琉中歷史關係論文集』（一九九三年）所收の陳捷先論文・張啓雄論文・鄭梁生論文・孫薇論文等。茂木敏夫「中華帝國の『近代』的再編と日本」（『岩波講座 近代日本と植民地』第一卷所收）。西里書行「東アジア世界史研究の視點・方法・論點―諸説の検討―」（『琉球大學教育學部紀要』第二七集）等参照。
- (2) 遠山茂樹「近代史から見た東アジア」（『歴史學研究』二七六號）。西里・前掲論文参照。
- (3) 同右。
- (4) 宗屬關係を基礎とする「大國中國と周邊諸國との關係」について、専ら「内政不干渉」の側面を強調するあまり、歴史的に「合理的」な秩序であったとみなす見解も提起されているが（前掲・茂木論文、宗主國の「懲罰權」行使の可能性にも留意すべきであろう）。
- (5) いわゆる「厚往薄來」（『中庸』）の理念から、「回賜品」が「進貢品」を上回るのを常としたことは、現實的には宗主國と屬國の利害對立の契機を内包していたと言える（坂野・前掲書七六頁以下参照）。
- (6) 西里書行「琉球處分前夜」（『那覇市史』通史篇第一卷（那覇市役所、昭和六〇年）参照）。
- (7) 西嶋・前掲書、濱下・前掲書参照。
- (8) 『清會典』卷三九（中華書局出版、一九九一年）。
- (9) 徐恭生「清代琉球接貢制度」、豐見山和行「琉球國の進貢貿易における護送船の意義について」（『第五屆中琉歷史關係學術會議論文集』、福建教育出版社、一九九六年）。
- (10) 『歷代寶案』（臺灣大學本）第八冊（第一四冊。中國第一歷史檔案館編『清代中琉關係檔案選編』（中華書局出版、一九九三年。以下、『選編』と略稱）三四三頁以下。同『清代中琉關係檔案續編』（以下、『續編』と略稱）一〇七〇頁以下。赤嶺誠紀『大航海時代の琉球』（沖繩タイムス社、一九八八年）参照。
- (11) 「閩浙總督玉德等奏報臺灣護送琉球二號貢船遭風夷使人等到省摺」（『選編』三四三頁）。
- (12) 神山親雲上らの報告文書は「琉球之一件」という表題で、鹿兒島縣の尙古集成館に所藏されており、最近、松尾千歲氏によって翻刻紹介されている（『鹿兒島縣歷史研究』第四號参照）。
- (13) 同右。
- (14) 球陽研究會編『球陽』卷一九（角川書店、昭和四九年）、原文編四〇〇頁、讀下し編四三九頁。
- (15) 『球陽』卷一九、原文編四〇四〜四〇五頁、讀下し編四四五〜四四七頁。
- (16) 「閩浙總督玉德奏」（『選編』三一七頁、三四一頁）。
- (17) 「浙江巡撫羅吉慶奏」（『選編』二八五〜二八六頁）。
- (18) 矢野仁一「嘉慶時代の姦盜の亂に就いて」（『歴史と地理』第一八卷第二號）。松浦章『中國の海賊』（東方書店、一九九五年）一二〇頁以下。

(19) 竹田龍兒「阮朝初期の清との關係」『ベトナム中國關係史』(山川出版社、一九七五年)五二一頁以下參照。

(20) 松浦・前掲書參照。なお、咸豐期に入ると、琉球「漂着」の中國人苦力を護送する途中、琉球の護送船と接貢船が清國沿岸で海賊に襲撃される事件が起きている(西里喜行「ロバートバウン號事件再考」『琉球王國評定所文書』第一一巻、卷頭論稿、一九九五年)。

(21) 『大清高宗純(乾隆) 皇帝實錄』(臺灣華文書局)二、卷五二、九三七頁(以下、『高宗實錄』二、卷五二のように略記)。王先謙纂修『十二朝東華錄』(文海出版)乾隆朝一、七七頁。

(22) 赤嶺守「清代の琉球漂流民送還體制について—乾隆二十五年(1760)の山陽西表船の漂着事例を中心に—」『東洋史研究』第五八卷第三號。俞玉儲「再論清代中國和琉球的貿易—兼論中琉護救漂風難船的活動—」『第二屆琉球・中國交涉史研討會論文集』(沖繩縣立圖書館、一九九五年)。

(23) 註(10)に同じ。

(24) 「山東巡撫古倫奏」「福建巡撫張師誠奏」『選編』四一〇～四一五頁。

(25) 「福建巡撫葉世倬奏」『選編』五七九頁。

(26) 俞玉儲・前掲論文參照。

(27) 豐見山・前掲論文參照。もっとも、一六八七(康熙二六)年の南京船の琉球漂着の事例のように、長崎貿易の歸途での商賣を目的とした「漂着」の可能性も無視できなかったことから、江戸幕府や薩摩藩は琉球が「漂着」を装った清國商船

による私貿易の據點となることを恐れ、漂着清國船の取り扱いはについては幕藩體制の規定を逸脱しないよう嚴重に指示している(上原兼善「一七世紀末期における琉球國の動向」『琉球王國評定所文書』第六卷、卷頭論稿、一九九一年)。

(28) 松浦章「十八～十九世紀における南西諸島漂着中國帆船より見た清代航運業の一側面」『關西大學東西學術研究所紀要』(關西大學東西學術研究所、昭和五八年)第一六輯。西里喜行「清代光緒年間の〈琉球國難民〉漂着事件について」『第二回琉球・中國交涉史に關するシンポジウム論文集』(沖繩縣立圖書館、一九九五年)。赤嶺・前掲書參照。

(29) 豐見山・前掲論文。俞玉儲・前掲論文。

(30) 高良倉吉「近世琉球における海運史の一側面」『琉球王國史の課題』(ひるぎ社、一九八九年)參照。

(31) 松浦章「清代沿海商船の紀州漂着について」『關西大學東西學術研究所紀要』二〇、同「清代客商と遠隔地商業」(同上二二)。

(32) 「船政之覺」『那覇市史』資料篇第一卷の二、二八五頁。

(33) 「那覇市史」資料篇第一卷の一〇「琉球資料」上(那覇市役所、平成元年)、三四頁、四四頁。

(34) 同右。

(35) 同右。

(36) 「船政之覺」『那覇市史』資料篇第一卷の二、二八八頁。

(37) 道光一三年八月甲辰「上諭」『宣宗實錄』七、卷二四二、四二九三頁。

(38) 「歷代實案」(臺灣大學本)一一冊、六五七五～六五七八

頁、六六三七～六六四〇頁。

(39) 琉球漂着船が密貿易船の疑いを懸けられた事例としては、

アヘン戦争の時期、比嘉筑登之ら六名乗りの國頭船が浙江省太平縣へ漂着し、取り調べられた事例がある。浙江巡撫の劉韻珂の上奏文に據ると、「遭風難夷比嘉筑登之ら六名」は「琉球國の八重山の人に係り、本國に在りて米粟黑繩を裝載して船に下り、道光貳拾壹年間參月初陸日、本國より開船し、送りて福建會館に至りて上納せんとす。初玖日大風あり、桅を折られて大洋に漂出したるに、人の米粟五十包を打搶するを被る。拾肆日漂流して太平縣境へ至る。經に該署縣の劉旭、營と會して馳往し査驗したるに、該夷船は委かに遭風に係り、桅蓬・楫具は損失して全からず。米粟黑繩を載有するも並えて違禁の物件なし。該難夷六名は均しく身に長領の大衣を穿き、蓄髮して赤足たり。漢語に通ぜざるも、内に一人略や漢字を識るあり。當に紙筆を給して書寫せしめ、前情を悉るを得たり」という。ここで注目すべき點は、琉球難民の比嘉らが「米粟黑繩を裝載して、送りて福建琉球會館へ至りて交納」する目的で福州へ向かい、途中で漂流中に海盜に遭つて「米粟五十包を打搶」されたと供述していることである。従來、福州琉球館へ「交納」船が派遣されたという前例はないので、比嘉らの供述には大きな問題が内包されており、密貿易船であつた可能性は否定できない。比嘉らの供述通り積み荷を海賊に掠奪されたとすれば責任追及されることを懸念した太平縣當局が「その何の處の洋面に在りて搶を被るや」と問い詰めたところ、漂着者のなかの「略や漢字を識

る」琉球人は「書して知らず」と回答したことから、「該難夷六名を將て、船内の米粟等の物を連ねて一律に縣城へ起運し安頓撫恤せしめ」た。報告を受けた布政使司は、偽裝漂着の可能性を疑い、府・縣に對して再度「難夷と偽稱し改裝して混蹟するの情弊ありや無きやを確查し、並びに何の處の洋面に在りて搶を被るに係るやを究明せしめ」たところ、府・縣は「營と會して、該夷人の書覆せる各情を反覆詰詢するも、仍お原詢と異なるなし」と再報告して來たため、通常の漂着船として取り扱うよう指示するに至る。アヘン戦争に巻き込まれた比嘉筑登之らが福州へ到着したのは、道光二十一年一〇月二五日、福州から原船で琉球へ歸還したのは道光二十二年五月一九日のことであつた。比嘉らの漂着船は無事歸還したものの、清國當局は「誠に難夷と偽稱し改裝して混蹟するの情弊あるを恐れ」、偽裝漂着船の疑いを懸けて厳しい訊問を繰り返したことに注目すべきであらう。清國當局の追及が厳しかったのは、アヘン戦争の渦中であつたという理由だけではなく、比嘉筑登之らが積み荷を福州琉球館へ輸送する途中海賊に襲われたと供述したことに不審を懷いたからであらう。その意味では清國側が偽裝漂着船の可能性を想定したのは當然の事であつたと言える（『續編』一三四六～一三四九頁、八二三頁。『歴代實案』校訂本一三冊、五九六～六三三頁參照）。

(40) 『球陽』卷七、原文編二七三頁。

(41) 徐恭生「清代琉球接貢制度」『第五屆中琉歷史關係學術會議論文集』（福建教育出版社、一九九六年）。豐見山和行「琉

球の對清外交について——貢免除問題を中心に——『琉球王國評定所文書』第三卷（浦添市教育委員會、一九八九年）。

(42) 註(9)(10)に同じ。

(43) 上原兼善『鎖國と藩貿易』（八重岳書房、昭和五六年）九一～九六頁参照。

(44) 上原兼善「一七世紀末期における琉球國の動向」『琉球王國評定所文書』第六卷（浦添市教育委員會、一九九一年）參照。

(45) 翁玉儲「清代における中國と琉球の貿易についての試論」『第一回琉球・中國交渉史に關するシンポジウム論文集』（沖縄縣立圖書館、一九九三年）の表一～表四參照。

(46) 「閩浙總督客爾古善等奏」『選編』一九～二〇頁。

(47) 那霸市歴史資料室編『那霸市史』資料編第一卷の九「琉球資料」漢文編、八六頁。

(48) 張存武『清韓宗藩貿易』（中央研究院近代史研究所、一九七八年）參照。

(49) 同右。

(50) 席裕福・沈師徐輯『皇朝政典類纂』卷一一七、市易五（文海出版、一〇七一頁）。

(51) 同右。

(52) 同右。

(53) 同右。

(54) 矢野仁一『近世支那外交史』（弘文堂書房、昭和五年）一四〇～一四一頁。

(55) 歐米船の東アジアへの航海狀況については、須藤利一『異

國船來琉記』（法政大學出版局、一九七四年）、大熊良一『異國船琉球來航史の研究』（鹿島出版會、昭和四六年）等參照。

(56) アーティスト號の探查航海について、

① Lindsay: Report of Proceedings on A Voyage to the Northern Ports of China. London, 1834.

② Cutzlaft, Charles: Journal of Three Voyage along the Coast of China in 1831, 1832, and 1833, with notices of Siam, Corea and the Loo-choo Islands. London, 1834.

などの一次史料の外、

③ H. B. Morse: The Chronicles of the EAST INDIA COMPANY trading to China (1635—1834) Vol. IV. pp. 333—334.

④ George, H. Kerr: Okinawa The History of an Island People, 1958 (1984), pp. 263—275.

⑤ 南木「鴉片戰爭以前英船阿美士德號在中國沿海的偵查活動」『鴉片戰爭史論文專集』（人民出版社、一九五八年）。

⑥ 《中國人民保衛海疆戰爭史》編寫組『中國人民保衛海疆戰爭史』（北京出版社、一九七九年）。

⑦ 大熊・前掲書

等が取り上げて検討している。アーティスト號關連の敘述は特に斷らない限り、以上の文獻に依據している。

(57) 『球陽』卷二〇、原文編四四八頁。

- (58) なお、三年後の一八三五年五月六日にも、英國船が福州へ到り、通商を要求するとともに、總督衙門へ刊行文書を提出したので、道光帝は福建・廣東當局に密命して發行所を調査させている。また同年八月二十六日には、米國船フーロン(Huron)號が廣東から福建を経て上海・山東へ航海し、清國側を慌てさせていることにも注目すべきであろう(郭廷以『近代中國史事日誌』第一冊)。
- (59) 道光二年五月丁未朔「上諭」(『宣宗實錄』六、卷二一・三、七四九頁)。
- (60) 席裕福・沈師徐輯『皇朝政典類纂』卷一一七、市易五(文海出版、一〇六三頁)。
- (61) 同右。
- (62) G. H. Kerr: Okinawa, pp. 265. 大熊・前掲書八四〇八五頁。
- (63) 同右。
- (64) もともと、H. B. Morse の前掲書によれば「この調査航海の結果、中國人民は外國人たちとのより廣範な交渉を決して嫌ってはおらず、アマースト號の乗員はどこでも最大級の友好的態度で接遇されたことが證明された。福州府では、貿易行為に反對する最も嚴格な布告が出されたけれども、ある程度の貿易が官僚たちの默認のもとに實行された」(p. 333)と指摘されていることに注目すべきであろう。他方、アマースト號の「探檢」航海によって得られた情報が後のアヘン戦争における英國艦隊の作戰計畫に基礎資料を提供したという指摘にも留意しておきたい(『中國人民保衛海疆開爭史』六五頁、牟安世『鴉片戰爭』五〇一五四頁(參照))。
- (65) 眞境名安興・島倉龍治『沖繩一千年史』(沖繩縣郷土研究會、大正一二年)五二九〇五三六頁等參照。
- (66) 『球陽』卷二一、原文編四五四頁。
- (67) 冊封使船(冠船)の持ち込む清國製品の取引(冠船貿易)については、豐見山和行『冠船貿易についての一考察―準備態勢を中心に―』、朱德蘭「一八三八年與一八六六年の封舟貿易」(『第三屆中琉歷史關係國際學術會議論文集』)參照。
- (68) 「御史帥方蔚奏請飭禁冊封琉球使臣家丁等私帶貨物摺」『選編』七六三頁。
- (69) 道光一八年二月丙午の「上諭」(『宣宗實錄』卷三〇六、中華書局影印『清實錄』第三七冊、七七〇頁)。
- (70) 道光一九年三月庚申の「上諭」(『宣宗實錄』卷三二〇、『十二朝東華錄』道光朝二、三二五頁)。
- (71) 註(68)に同じ。『選編』七六三頁。
- (72) 「福建巡撫吳文鎔奏琉球國遣使來閩請照舊開年進貢摺」『選編』八一二頁。
- (73) 眞境名等・前掲書五三八〇五三九頁。
- (74) 同右。
- (75) 『那覇市史』資料編第一卷の六「家譜資料」二の下(那覇市史編集室、昭和五五年)、九三八頁。
- (76) 註(72)に同じ。『選編』八一二〇八一四頁。
- (77) 『那覇市史』資料編第一卷の六「家譜資料」二の下、九三八頁〇九三九頁。
- (78) 註(72)に同じ。『選編』八一四頁。

(79) 『那覇市史』資料編第一巻の六「家譜資料」二の下、九三九頁。

(80) 道光二〇年一月戊申「上諭」(『宣宗實錄』卷三四一、『十二朝東華錄』道光朝二、三三三頁裏)。

(81) 三年一頁から四年一頁へ改定された暹羅の場合、アヘン戦争後の道光三年に至っても「舊例に仍照して遣使し、方物を呈進し、並びに二十一年の萬壽を進め、及び二十年の貢物を補進」(『宣宗實錄』卷三九五)したり、琉球の接貢船に準じて免稅するよう繰り返し要請し、接貢船一隻に限って免稅を認められている(『宣宗實錄』卷四〇一、卷四〇四)。

(82) 道光二二年閏三月六日に北京へ到着した向國鼎らは、急いで通常通りの進貢儀禮を済ませるや、一ヵ月後の四月六日には北京を出發して福州へ向かうことになるけれども、貢期改定問題で通常の進貢時期よりも遅れ、「將に夏令に屆らんとする」時期であつたから、陸路の炎熱を畏れて「通州の張家灣より上船し、水路門へ回る」ことを要請して許可された。ところが、福州へ向かう途中、「五月二五日亥の刻、琉球國貢使の船隻は宿遷縣より境に入り、該縣親ら往きて接護し、行きて郭家行地方に至りて停泊、二十六日寅の刻、正に開行せんとするの間に在りて、陟に西北の風暴れ浪大となり、船隻は「覆溺」してしまつた。幸い向國鼎・林常裕らは別の船に救助されたものの、都通事らは溺死し、従人の向國楷ら「十一名は杳として下落なし」という痛ましい事故に遭遇するに至つたのである(『歷代實案』校訂本第一三冊、二頁、一一頁。『選編』八二六〜八二七頁)。歸途の遭難で大きな

犠牲を拂つた琉球進貢使一行は辛うじて福州へ歸着することができたものの、福州もアヘン戦争の影響で騒然たる状況を呈していたから、なお戦火の恐怖に脅えざるを得なかった。副使の林常裕はまもなく病氣に罹り、「調治するも痊せず」、道光二二年八月二〇日遂に福州の琉球館で病没するに至る(『歷代實案』校訂本第一三冊、二二頁)。貢期復舊の要請が容れられて従來通りの進貢儀禮の任務を果たすことができたものの、多くの犠牲を拂つた進貢使一行は、進貢を繼續し得る條件がアヘン戦争によってさらに大きく制約されつつあることを實感したのであらう。

(83) アヘン戦争の勃發から終結に至る顛末につづつは、H. B. Morse: *The International Relations of the Chinese Empire*. Vol. I, pp. 255~297. 矢野仁一『アヘン戦争と香港』(弘文堂書房、昭和一四年)二〇〇頁以下。佐々木正哉『鴉片戦争の研究』『近代中國』第五卷く第十六卷。鮑正鵠『鴉片戦争』(新知識出版社、一九五四年)。丁名楠等『帝國主義侵華史』(人民出版社、一九六二年)第一卷二三頁〜四九頁。復旦大學歴史系等編・野原等譯『中國近代史』(三省堂、一九八一年)一。牟安世『鴉片戦争』(上海出版社、一九八二年)等参照。なお、牟安世氏はアヘン戦争の経過を五つの段階に區分し、一八三九年九月四日の九龍の戦いを以てアヘン戦争の起點とみなしている(前掲書一五五頁)。ここでは、通説に従つて一八四〇年後半をアヘン戦争勃發の時期とする。

(84) 琉球側史料では(道光二〇年)七・八の兩月、英吉利國

の海船三隻漂來するあり」という見出しで事件の概略が記述されている(『球陽』卷二一、原文編四六三～四六四頁)。

- (85) インディアノーク號事件に關する英國側の史料(J. J. Bowman, "Loss of the Indian Oak," *The Nautical Magazine and Naval Chronicle*, for 1841, London, pp. 296~308, 385~394. をはじめ四點)は照屋善彦氏の翻譯を附して『北谷町史』第二卷に收録されている。以下、特に斷らない限り、本書に據る。

- (86) 『北谷町史』第二卷、四〇二・四〇三頁。

- (87) 琉球側では、英國人の滯留が長引くことになれば「國土之煩」となり輕視できないので、早めに歸還させるために、ジャンク船を建造して提供しないわけにはいかないと認識されている(『那覇市史』資料編第一卷七、家譜資料三、四八七頁)。

- (88) 周知のように、一八二五(文政八、道光五)年に發令された「無二念打拂令」によれば「異國船乗客候を見受候へ、其所ニ有合候人夫を以、不及有無、一圖ニ打拂」よう命じられていたが、この「打拂令」が緩和されたのは一八四二年(天保一三年)のことである(兒玉幸多・佐々木潤之助編『新版 史料による日本の歩み』近世編、三三七頁、三六二～三六三頁)。

- (89) 註(87)に同じ。『那覇市史』資料編第一卷七、四八七頁。

- (90) 矢野・前掲書二四二～二四三頁参照。

- (91) 佐々木・前掲論文(『近代中國』第一六卷)。前掲『中國近代史』一、六七頁～七一頁参照。

- (92) 同右。

- (93) 郭廷以編著『近代中國史事日誌』第一冊。矢野・前掲書二四六頁。

- (94) Arthur Cunynghame: *An Aide-de-Camps Recollections of Service in China*, pp. 100, 『鴉片戰爭末期英軍在長江下游的侵略罪行』(上海人民出版社、一九六四年)二五一頁。前掲『中國近代史』一、七〇頁。

- (95) H. B. Morse: *The International Relations of the Chinese Empire*. Vol. I, pp. 267.

- (96) 『球陽』卷二一、原文編四六六～四六七頁。

- (97) 同右。

- (98) 同右。

- (99) 同右。

- (100) 同右。

- (101) G. H. Kerr: *Okinawa*, pp. 249~275. なお、本書の日本語譯『琉球の歴史』(琉球列島米國民政府、一九五五年)二一三～二一五頁参照。

- (102) 矢野・前掲書二二三～二二四頁。佐々木・前掲論文(『近代中國』第五・六卷)。

- (103) 『籌辦夷務始末』一、卷之一八(臺聯國風出版社、三四五～三四七頁)。

- (104) 同右。

- (105) 郭廷以・前掲書等参照。

- (106) 註(83)に同じ。

- (107) 同右。

- (108) 佐々木正哉「南京條約の締結とその後の問題」『近代中國』二二(巖南堂書店、一九九一年)参照。
- (109) 佐々木正哉編『鴉片戰爭の研究 資料編』(近代中國研究委員會、一九六四年)、二一〇～二二頁。
- (110) 『籌辦夷務始末』二、卷之五九(臺灣國風出版社、二〇七～二〇八頁)。
- (111) 同右。
- (112) 佐々木・前掲論文参照。
- (113) サマラン號の探查航海について、
- ① Edward Belcher: Narrative of the Voyage of H. M. S. Samarang during the Years (1843—46).
- ② Arthur Adams: Notes from a Journal of Research into the Natural History of the Countries Visited during the Voyage of H. M. S. Samarang.
- などの航海記録の外、
- ③ 大熊良一「イギリス軍艦サマラン號の寄港」『異國船琉球來航史の研究』。
- ④ 須藤利一「アダムスの〈那覇見聞録〉」『異國船來琉記』等が紹介している。
- (114) ベルチャー艦長の「略歴」及びサマラン號の琉球來航の概略については、須藤「サマラン號來航附記」(『南島』第一輯

所收) 参照。

- (115) 同右。
- (116) 「八重山島之内宮良津口に大英國之船壹艘致來着候次第左に申上候」。本文書は正木任氏によって翻刻紹介されている(『南島』第一輯)。
- (117) 同右。
- (118) 「大濱用要氏系圖」に添附された八重山島役人から琉球王府あての要望書(『南島』第一輯)。
- (119) 『球陽』卷二一、原文編四七二～四七六頁。
- (120) 同右。
- (121) 『球陽』卷二一、原文編四七九～四八〇頁。
- (122) 同右。
- (123) 同右。
- (124) 『歴代寶案』別集・佛英情狀(臺灣大學本第一五冊、八七三七頁以下) 参照。
- 〔附記〕 本稿の校正終了後に、川勝守著『日本近世と東アジア世界』(吉川弘文館、二〇〇〇年六月)に接した。本書には多くの注目すべき論點が提示されている。別の機會に検討したい。

be granted fifty *mu* of land as stated in the Chapter of Economy 食貨志 of the *Jin History* 『晉書』 and a fragment of *Jin Gu-Shi* 『晉故事』, it seems that a man was unable to cultivate such a large area of land in that time considering the labour cultivating capacity. Thus, it was probably a general principle laid by the government on the basis of farmer's cultivating capacity. Its ideal is consistent with the regulation over household tribute. On the other hand, the basic part of the *zu-diao* system was instituted early in the founding period of the Western Jin rather than the first year of Tai-kang 太康 when the Wu 吳 dynasty was recovered. Under the system, the household tribute 戶調 is levied according to the nine-rank principle 九品相通 (nine ranks are distinguished on the basis of household property), while the land tax 地租 is levied by referring to the actual size of cultivated land of each household. The tax rate is four *dou* 斗 per *mu*. Thus, the *zu-diao* system of the Western Jin dynasty is obviously inherited from the land and tribute system of the Wei dynasty 魏 (220—265), and is ideologically different from the *zu-diao* collection system after the implementation of the *Jun-tian* system 均田制 by the Northern Wei dynasty 北魏. It itself implies the consistency of the development of socio-economic system in the early medieval China.

**A STUDY ON THE UNREST AND CAUSES OF THE
INVESTITURE-TRIBUTARY SYSTEM 冊封進貢體制 IN
THE YEARS OF JIAQING 嘉慶 AND DAOGUANG 道光 —WITH REFERENCE TO THE RYUKYUAN
TRIBUTARY RELATIONS WITH CHINA—**

NISHIZATO Kiko

Even before the Opium War, the unrest of the Investiture-Tributary System had begun as a result of the occurrence of the following factors which were internal and external pressure upon the System. 1) The Ryukyuan tributary ships often suffered from maritime accidents and assaults by pirates. 2) The Ryukyuan ships drifting ashore on the coast of China since the years of Jiaqing and Daoguang had increased, and the

contraband trade committed by the Ryukyuan ships were prevalent. 3) Tributary nations always tried to expand the trade with China, and sometimes committed illegal activities against the established trade regulations. 4) The western merchants, who desired trading ports outside Guangdong province 廣東 and sailed from the coastal cities of China to Korea as well as Ryukyu forcibly, repeatedly committed illegal trade and gathered important informations on China and the tributary nations in order to destroy the System. 5) Heavy economic stress was caused by conducting the Investiture ceremonies, and the troubles were followed by a drastic revision of the tributary term.

During the Opium War, the crises of the Ryukyuan tributary relations with China became apparent through the occurrence of the following events. 1) Though Britain had enmity against China, the Ryukyuan authorities hospitably treated the crew of the British warship, the Indian Oak which drifted ashore on the coast of Okinawa Island. 2) Troubles were caused by the British warships which took part in the Opium War, and their calling at the Ryukyu Islands for the purpose of securing provisions. 3) The last factor is the problem concerning the opening of Fuzhou 福州 to foreign trade during the negotiation between the Chinese and British representatives. The former had opposed the opening of Fuzhou in consideration of the traditional Ryukyuan tributary relations, but finally complied with British request. Therefore the Ryukyu Kingdom was faced with the strong pressure from the British since just after the end of the Opium War.

THE CHRONOLOGY OF THE SÄKİZ YÜKMÄK YARUQ AND THE QUANŠI-IM PUSAR SŪTRAS

ODA Juten

Old Turkish Buddhist scriptures brought from the Turfan basin and the Dunhuang caves are one of the most wonderful legacies of the culture of the Silk Road lasting about six hundred years from the ninth century to the fourteenth century. We would like to study the chronology of the